

国語教育 相談室

小学校

No.58

国語教育相談室
No.58

特集

国語力を身につける



いま必要な「国語力」とは何か 安彦忠彦 内田伸子 本川達雄

実践提案

教科を超えた学習の場で「国語力」を身につける



この言葉がすき 宮本恒靖



巻頭エッセイ

教えること、教わること。
ダニエル・カール

連載

わたしの国語教室 若い先生たちへのエール

連載

一寸苦言 ともに学ぶ《青二才・赤っ恥》

集中
連載

子どもを伸ばす国語授業のヒント

連載

書写

書写の時間を楽しく 文字の組み立て方を理解して、文字の形を整えて書こう

書写ってこんなにもおもしろい！ 書写の要素 字形…内外の組み立て方のポイント③

平成18年度教科書下巻 訂正箇所のお知らせ

光村図書

光村図書

小学校 国語教育相談室 通巻No.111 定価126円(税込)

2006(平成18)年8月28日発行

発行人=常田 寛

発行所=光村図書出版株式会社

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9

電話03-3493-2111

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp

印刷所=村田印刷工業株式会社

デザイン=秋葉 幹司

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。

くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp>

広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

Contents

この言葉がすき Seize the day. 宮本恒靖

2 巻頭エッセイ 教えること、教わること。「生き方」を教えるということ ダニエル・カール

特集 国語力を身につける



6 いま必要な「国語力」とは何か

語彙と論理の吟味の力 安彦忠彦

国語の力 ―考える力を育むことばの教育― 内田伸子

いま必要な「理科系の文章力」..... 本川達雄

12 教科を超えた学習の場で「国語力」を身につける

実践提案 ① 国語で身につけた力を算数に生かす

筋道を立てて考え、情報を取捨選択できる力を(4年)..... 矢嶋 康

実践提案 ② 理科学習ではぐくむ読解力

実験から得た情報を整理し、考察・感想を述べる(6年) 新しい指導を考える会

実践提案 ③ 国語と総合的な学習の時間の協力

「非連続型テキスト」を読み解くための試み(5年) 新しい指導を考える会

24 集中連載 ―さあチャレンジ！ 子どもを伸ばす国語授業のヒント ②

学習場面に合わせた板書指導の工夫 岩崎 保

28 連載 ―一寸苦言

ともに学ぶ《青二才・赤っ恥》..... 一徹国語人

30 連載 ―わたしの国語教室 ⑭ 若い先生たちへのエール

教師が育てたように子どもは育つ 吉永幸司

✎ 書写の時間を考えよう

32 連載 ―書写の時間を楽しく ②

文字の組み立て方を理解して、文字の形を整えて書こう(4年) 中込繁樹

36 連載 ―書写ってこんなにおもしろい！ ②①

書写の要素 字形…内外の組み立て方のポイント③ 宮澤正明

38 光村図書既刊本のご案内

40 「光村チャンネル」リニューアルのお知らせ

42 平成18年度教科書下巻 訂正箇所のお知らせ

43 お知らせ

©GAMBA OSAKA

この言葉がすき

Seize the day.
宮本恒靖

Seize the day.

「今を生きる」という意味で使われている、この言葉が好きです。

中学生の時に見た映画に登場していた言葉なのですが、とても印象に残った言葉でした。

「今を精一杯生きる」、「今、この瞬間を大事にする」ということは、僕自身とても大切にしていることです。

今のこの瞬間を精一杯生きることが、その先の未来にも繋がっていくことを感じながら、『今』を大切に生きたいと思います。

宮本 恒靖 プロサッカー選手（ガンバ大阪所属）

みやもと つねやす

1977年、大阪府生まれ。10歳からサッカーを始め、92年ガンバ大阪ユースに入団、95年ガンバ大阪に入団。05年にはJリーグ年間優勝を果たす。冷静な判断で相手の動きを読み、ディフェンスラインを統率する頭脳明晰なプレイで、日本を代表するディフェンダーとして活躍中。FIFAワールドカップドイツ大会では、日本代表チームの主将を務めた。



「生き方」を教えるということと

タレント ダニエル・カール

僕は教師という職業に大きな尊敬の念を抱いています。先生たちは、子供たちに授業を通して様々な教育をするだけでなく、人として「どう生きるか」ということを教えることを求められます。もちろん「生き方」を教えるのは親であるべきです。しかし、とにかく誰もが忙しい。結局、先生たちが「代理親」として、四十人の子供たちを導くために孤軍奮闘ということになります。

さてそれでは、国語の先生たちは、子供たちに「生き方」をどう教えていくのが一番いいのでしょうか？僕は、次の三つのエリアで力を入れていけば、将来子供たちが様々な困難を回避できるようになるのではないかと考えます。

1 デイベートを取り入れる

子供たちには、物事について、感情ではなく論理ではっきりと話をする方法を教えるべきです。海外ではよく、日本人は感情的ではないような言い方をされますが、僕はそれは大きな誤解だと思います。

まず、日本人は非常にエモーショナルです。ただ、それを表現することが少ないだけです。この感情的であるという特徴は、そのコントロールの仕方を知らないでいると、時には大きな問題に繋がることもあります。普段はおとなしい子が、突然感情を爆発させて暴力的になるという話を時々聞きますが、それも一つの例といえるでしょう。

まず、すべての子供たちに、人は平等にその意見を述べる権利があることを納得させなければなりません。これは「日本国憲法」にも「言論の自由」として明記してあることです。しかし、時にはその権利のために戦うこともあることを知らなくてはなりません。もし、クラスの中のいじめっ子が、誰かの意見に対し、笑ったり馬鹿にしたりすることがあったら、教師やその他の子供たちは、即座にその行為を厳しく咎め、やめさせることが倫理的な義務です。

次に私は、授業で頻繁にデイベートを取り入れるべきだと思います。デイベートでは、二つの

チームがそれぞれ同じトピックについてリサーチし、その論点について様々な良い点、悪い点を書き出していきます。そしてクラスの前でデイベートを展開します。ルールはシンプルですが堅固なものです。デイベートは常に適切で丁寧な言葉遣いで行わなければなりません。それぞれの発言にはタイムリミットがあります。相手を侮辱するようなコメントは絶対に許されません。最も説得力のある論理を展開したチームが勝者となります。

最初は簡単なテーマを選ぶのがいいでしょう。例えば、犬を飼うメリット、デメリットと猫を飼うメリット、デメリットといったテーマです。まず、クラスの中で、誰が犬が好きか、猫が好きかを聞いておきます。そしてわざと、犬派の子は猫の支持を、猫派の子は犬の支持をするデイベートをさせるのです。そうすれば、感情ではなく論理でデイベートを展開することが必要となるからです。

このようなどうでもいいトピックで、お互いを

のしりあうことなくデイベートができるようになれば、次に、もっと論争の起きそうなトピック、例えば原子力エネルギー問題や男女平等問題、死刑問題、君が代問題など、難しいトピックへと移っていくことができます。

2 差別を議論する

子供たちには「差別」というものが「悪」であることをはっきりと話していかなくてはなりません。「差別」や「偏見」は、理屈に合わない（つまり、完全に感情に支配された）侮蔑・相手の身体的な特徴、社会的地位、宗教、国籍、性別、政治的信条などに対する侮蔑です。「差別」は、相手を傷つけるということ以外、全く目的を有しないからこそ「邪悪」なのです。

「差別」は論理で撃退することができます。多くの人が、芸能人というものに偏見を持っています。一度も会ったことがなくてもです。面白いですよね。どうして人は、一度も会ったことがない人や集団に対して「偏見」を持つことができるのでしょうか。「差別」が論理に合わないことははっきり示せば、自ずとその「差別」は消えていくものです。

子供たちが持つかもしれない「差別」を芽生えさせないためには、すべての人間には「長所」「短所」があるということを、はっきり教えていく必要があります。そしてそれが自然なこと、当たり前のことなんだということを教えます。

スポーツが得意な子もいれば、音楽が得意な子、英語や数学が得意な子など、様々です。その多様性が私たち人間を「一人の人格」として作り上げていることを伝えます。「違い」はあざける対象ではなく、「尊敬する」対象であることを教えます。

子供たちは、その「差別」のほとんどを親から学びます。親の何気ない話を聞くうちに、自然に子供たちに浸透してしまうのです。もちろん子供たちは、その「差別感」を意識してはいません。だからこそ、誰かが言葉にしてはつきりと示してやらなければならないのです。気づくことが、その「差別」を捨てる第一歩になるのです。

3 中毒への警告をする

人間の生活には多くの「中毒」が隠れています。日本で一番多いのは、酒、タバコ、ポルノ漫画、セックス、ドラッグ、パチンコ、ギャンブル、そして金でしょうか。

そうです。お金も「中毒」の一種です。二九%もの高利ですら金を借りる人がいる。これは「金」が怖い「中毒」になりうる証拠です。

現在、日本の学校では、こういった様々な「中毒」に対する教育が全くとっていいほど行われていません。家庭でも然りです。先に挙げたようなものに「中毒」になることが、どれだけ健康面、経済面に恐ろしい影響を与えるものか、子供たちは全く知らされていないのです。彼らが高校

を卒業するころには、世間に溢れるそういった誘惑に全く無防備と言わざるを得ません。待ち構える「魔の手」から逃れる術を持っていないのです。

教師として、子供たちに「生きる術」を教えたと思うなら、事実をしつかりと伝え、どうしたらそういう危険を回避できるのか、「方法」を明確に教えていくことが何よりも大切でしょう。

ダニエル・カール

1960年、アメリカ・カリフォルニア州生まれ。1981年、英語指導主事助手として山形県に赴任し、3年間英語教育に従事。そのとき鍛えた山形弁と旺盛な好奇心で、芸能活動をはじめ、講演、執筆活動など何でもこなすマルチタレントとして活躍中。著書に『ダニエル・カールの国際交流入門』（ぎょうせい）『超簡単トラベル英会話』（マガジンハウス）『オラが心の日本アメリカ』（NHK出版）ほか。



国語力を 身につける

今年二月に発表された中央教育審議会の審議経過報告には、「国語力の育成」が大きく謳われています。PISA調査の読解力において低下傾向が見られることも踏まえ、漢字の読み書きなどの知識・技能の定着とともに、思考力・表現力等の育成が、これからの課題として掲げられています。

審議経過報告の中には、「言葉は、『確かな学力』を形成する基盤」であり、「国語力の育成」は、「国語科を中核としながらも、国語科以外の教科等と連携して、すべての教育活動を通じて」重視することが求められると記されています。

今回の特集は二部構成として、「国語力を身につける」を取り上げました。第一部では、三人の先生方に、それぞれの立場から、「いま必要な『国語力』とは何か」について提言をいただきました。さらに第二部では、これから求められる国語力育成のあり方として、「教科を超えた学習の場で『国語力』を身につける」試みの実践提案を掲載しました。

子どもたちのために何をすべきか、これをきっかけに、先生方とともに考えていくことができればと願います。



語彙と論理と 吟味の力

早稲田大学教育学部教授 安彦 忠彦

「国語の力」というと、国語教育関係の方は、言語能力とともに必ず読解能力、それも人間の心情の読み取りや、作品や作者の意図を汲み取り、鑑賞する能力としての道徳的・芸術的情操の育成をあげる人が多い。なぜ、そうなのだろうか。

どこの国も、国語という教科によって、何ほどか「国民的教養としての道徳的情操」を育てようとする。日本の国語科だけが例外ではない。けれども、欧米の主要国では、それとともに、きちんとした言語能力を育てるために、別に「言語技術科」という種類の教育の場をもっている。日本には、過去十年ほどはその種の教育が必要だとする声が高まっているが、教育行政を経て学校の中には入ってきていない。そのため、その種の実践が増えていても、個々の教師の個人的な試みとしていくつも見られるだけで、学校の公式の教科目に具体化されていない。むしろ、そのような現状を見て、有志が学校の外で種々の実践や研究の場を増やしている。(例…三森ゆりか氏の「つくば言語技術教育研究所」など)

まず、最近の大人がすでに「語彙の数」が少ない。漫画やテレビ等のメディアによる影響もあるが、図や画像、映像での表現が増えて、文字による言語表現は一部の愛好者以外は非常に減っている。それが最もよく分かるのが携帯電話やインターネットのメールである。それも簡潔で正確な表現というよりも、記号や絵や画像で彩られた、第三者には分からないような暗号文のようなものが大部分であり、「誰にでも正確に分ち伝えられる」文字言語の基本性格を逸脱したものが多く、標準的な語彙に無関心である。

これに伴って、論理的な思考や表現を一層求められる時代や社会であるのに、逆に個人的な関係の思考や表現で、閉じた人間関係や社会、コミュニケーションをつくりあげようとしがちなのが日本人の現状であろう。それで済んでしまう日本という国ないしは日本人という国民の、地理的・歴史的条件も無視できないが、これからはそれでは到底済まない時代に入っていく。あらゆる問題が、地球的規模・人類的規模で考えられねばならなくなってくる。そうであれば、すべての国の人に分かるような論理的な思考や表現を心がけねばならないであろう。もっと子どもたちの視野を国外にまで広げなくてはならない。

さらに、言語はコミュニケーションの道具であるが、その際、人を一定の行動へ動かすように用いられる宣伝や思想教化の道具でもある。多くの政治的な役割を負っている人の発言は、基本的にそのような性格を帯びる。したがって、聴く者は、その人の言葉を「吟味」にかけ、表面上の意味以外の別の意図は何であるかについて、明晰な論理で問題点を指摘・批判し、その種の言葉に惑わされないような鋭い読みのできる力を持たなければならぬ。

私自身は、純粋な言語能力をしっかりと育成するために、「語彙と論理と吟味」の能力に焦点を当てた国語教育が必要だと考えている。一部の人から、国語教育を「文学教育」と「言語教育」に分けよ、との主張が出されているが、私も似た方向で考えている。いわゆる「文学教材」による心情の読み取りなどは、一種の芸術鑑賞の仕方を知ることであり、それを一つの答えでまとめようとすること自体、よほど丁寧な、文芸批評的な学習を通すことなしには、かえって国語の教育が成り立たなくなる心配がある。道徳教材の読み取りと何ら変わらないものになる可能性がある。むしろ、文芸批評の方法的な学習によって、教材の読後の鑑賞自体は学習者各自に任されてよい。向山洋一氏の「分析批評」による読解は、その種のものの典型であると言える。

今日の子ども・青年の国語の力を、現代という地球社会的な観点から見れば、国の内外の誰とでもコミュニケーションがとれる読み、書き、話す能力が求められており、その意味では、語彙力や、論理的な思考力と表現力を伴う読み書き・話す聞く能力を、系統的・体系的に育てなければならぬ。その際、最も大切なことは、テレビ等のジャーナリズムのもつ情報操作に対して、それを吟味し、批判し、そして正していこうとする態度と能力を、教育目標として示さねばならない。そうでなければ、簡単にジャーナリズムに乗せられ、ただ書かれていることをそのまま読むだけの人形のように、主体的な判断能力を欠いた人間が育つであろう。それでは社会に追隨する者は増えても、社会をより望ましいものに変えていく者は容易には現れない。そんな教育でよいとは思えない。

ればならない。最近、欧米で盛んになりつつある「メディア・リテラシー」の能力とはそのようなものを含んでいる。日本の国語教育は、もっとこのような部分に力を入れたものにならないければ、今後の国語教育の真価が問われることになる。まずは大人の自覚が求められよう。

最後に、あらためて「語彙」の数に立ち戻り、別の面からその重要性について触れておきたい。それは、言語が思考の道具であり、コミュニケーションの道具であるとともに、実は「人間の内面的世界の構成素材」でもある、ということである。この素材たる言語が数多く記憶されていれば、その人の内面的世界も豊かで彩りのあるものとなり、何かを表現するときに、その豊かな語彙の中からよりの確で多様な言語が選ばれよう。それは、その人の心が、そのような言語によって構成されており、より多くの選択肢の中から、その人の精神世界を表現する素材を得ることができからである。語彙を多く記憶することを馬鹿にしてはならない。語句や文章の暗唱についても同様のことが言える。軽んじてはならない。



安彦 忠彦 (あびこ ただひこ)
1942年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部教授。中等教育課程(中等カリキュラム)論を中心に、教育方法や教育評価が専門。現在、文部科学省中央教育審議会委員を務める。日本カリキュラム学会代表理事、日本教育方法学会理事、日本教育技術学会理事などを歴任。『新学力観と基礎学力』『カリキュラム開発で進める学校改革』(明治図書)ほか著書多数。



国語の力

—考える力を育むことばの教育—

お茶の水女子大学副学長

内田 伸子

「現地の学校に長くいる子どもの方が、日本語補習校で作る作文がうまいという現象がありました。それは言語能力というものが、単に〇〇語の熟達ということだけでなく、文化を継承する努力によって自己の内面を耕すという、人間に共通な性質をもっている、第二言語と格闘している子どもの方がそういう能力が高いのだという気がしています。だからといって、日本で第二言語を早期に教えるべきだというのでは決してありません。そうではなく、日本でなされている国語教育がいささか頼りないと思うのです。帰国後に受けた中学、高校の授業では、自分自身の変革を迫られたり、中身をしばらく出させられたりするような体験には不幸にして出会えませんでした。」(※1)

これは、三歳十か月から十五歳まで旧西ドイツに滞在した帰国子女のレポートの一部である。筆者の「発達心理学」の授業では、授業についての疑問やコメントなどを書いてもらう三分間作文を課しているが、第二言語学習について取り上げた日、この学生は「思いが足りすぎてとても三分間では書けない」と言い、一週間後にA4版レポート用紙十五枚が提出された。十一年半ドイツで暮らしても「とうとう一度もドイツ語を自由に

使えたことはなく、高学年になるほどその不自由さは増しました。」という書き出しで始まる文章は日本の国語教育についての痛烈な批判で締めくくられている。彼女が指摘しているように、「自分自身の変革を迫られたり、中身をしばらく出させられたりするような体験」が国語教育で与えられるであろうか。

教育課程改訂のキーワードとなった「生きる力」とは、課題を発見し、課題を解決する能力を指している。戦後から続いた偏差値主義教育の中では答が一つ、答にいたる思考経路も一本という収束的思考力(暗記能力)が大事にされてきた。しかし、人が人生で直面する課題は答が決まっていることは少ない。答が一つとは限らず、答にいたる思考経路も一つだけとは限らぬ課題に答を出すことができる「拡散的思考力」、すなわち、考え、想像し、創造することこそが大切である。二〇〇四年の新聞各紙には「高一生の学習到達度、三年前比、日本下がる」の見出しが踊り、経済協力開発機構(OECD)による第二回(二〇〇三年)の「国際学力比較調査」(PISA)の結果が掲載された。「読解力」は八位から十四位に、「数学応用力」は一位から六位に下がったという新聞各紙の報道に、当時の中山成彬文部科学大臣は「授業時間数を増やす」「競争を強化する」と述べ、学習指導要領の見直しを表明した。

日本の十五歳は、教師のことばや教科書に書かれたことばを「真実」として受け身的に受け取り、覚えて使うというタイプの学習に慣れている。その結果、自分で考え判断するような力は育たない。PISAの結果は日本の教育で欠けていた面を浮き彫りにすることになった。先達の知を鵜呑みにして受け入れ覚えて使うのではなく、子ども自身の知の変革や新たな知の発見や創造につながるような、生きて働くことばは、どうやった

ら育てることができるのであろうか。

宮城教育大学名誉教授の武田忠氏は、小学校の国語教材と授業のディスコース(談話)構造の分析を行ったところ、教室での授業が「教材の記述内容を確認するだけの学習になっていると指摘している。教師は欠陥のある説明文教材を「事実」として解説する。子どもも鵜呑みにする。教員志望の学生たちに欠陥教材を分析させても、教材の記述は絶対的真実として受け入れてしまい、欠陥があることに気づかないのである。武田氏は、学生たちが小学校以来、教師のことばや教材を受け身的に受け入れる態度で臨んできた結果、対象を批判的に捉える態度が失われてしまっているのではないかと推測している。だから、大学生になった段階では、教材の中の深刻な問題点すら見つけることができなくなっている。(※2)

本当の意味での学びが起るためには「知識をたくさん持っている」ことではなく「知識の意味を捉え、自分の理解の限界もメタ的に捉え、たえず学び直して自分を成長させていく」力こそが必要になる。教科書に書かれた事実や教師の説明のことばを黙って受容するのではなく、疑問をもち問いを発し異議申し立てができなくてはならない。「権威」のことばを黙って鵜呑みにして受け入れるという受身的な知の受容者の立場に甘んじていては、何も新しいものは生み出せない。

生きて働くことばの力を鍛えるためには、自分の思いやイメージを明確にして相手に伝えるという言語活動を媒介にして、ことばを駆使することが必要である。国語、数学、理科、社会などそれぞれの教科でことばをめぐる四つの活動——情報を取り入れ——「聞く」「読む」＋「心内イメージの明確化と表出」「話す」「書く」——を子どもに行わせなくてはならない。ことばを駆使する活動を通して、それぞれの教科の基礎・基本

の習得に留まらず、ことばの力が強化されるのである。

「言語は生活や、その必要や、さまざまな経験から生じる。最初、私の生徒(注…ヘレン・ケラー)の心はまったく空虚であった。彼女は理解できない世界に住んでいた。言語と知識とは固く結びついている。(中略)私は決して言語を教える目的のために、言語を教えたのではない。考えを伝える手段として不断に言語を用いたのである。」—アン・サリバン(※3)

ことばは理性や内省の手段となる。教室の中では、思考を練る手段、理性や内省の道具として生きて働くことばを子どもに向かつて発しなくてはならない。考える手段としての国語の力を子どもたちに習得させ、使いこなせるようにすることが、今、日本の国語教育に求められる課題である。

「引用文献」

- ※1 内田伸子 第2言語学習における成熟的制約——子どもの英語習得の過程——桐谷茂(編)『ことばと心の発達2——ことばの獲得』ミネルヴァ書房(二九九九)
- ※2 武田忠『学ぶ力をうばう教育——考えない学生がなぜ生まれるのか』新曜社(二九九八)
- ※3 アン・サリバン著・榎恭子訳『ヘレン・ケラーはどう教育されたか——サリバン先生の記録——』明治図書(一九七三)



内田 伸子 (うちだ のぶこ)

1946年、群馬県生まれ。お茶の水女子大学理事兼副学長。専門は発達心理学・認知心理学。文部科学省中央教育審議会国語専門分科会委員、文化庁文化審議会国語分科会委員を務める。大学で教鞭をとるかたわら、NHK教育テレビの幼児番組作りや講演会など多方面で活躍。『子どもの文章——書くこと考えること——』(東京大学出版会)、『想像力；創造の泉をさぐる』(講談社)、『発達心理学——ことばの獲得と教育——』(岩波書店)、『ことばの生まれ育つ教室——子どもの内面を耕す授業——』(監修、金子書房)ほか著書多数。

いま必要な 「理科系の文章力」

東京工業大学大学院教授 本川 達雄

私は理科（生物）の教師だが、言葉の大切さは、日々、痛感させられている。理科系であれ文科系であれ、われわれは言葉で考え、言葉で意思を伝え合う。言葉の学習が学校教育の一番の基礎であり、とくに小学校では言葉だけを教えればよいようなもの。すべての教科を「拡大した国語」と考えてかまわない（数式も言葉の一種）。学校教育の中心は国語なのである。

ただし、文科系と理科系とは、言葉の使い方が大いに違う。イメージが重なり合いながら構成されていく詩の世界など、受け手がどのようなイメージを浮かべるかに、かなりの自由度があり、そこが文学の醍醐味。

一方、自然科学の文章は、受け手の自由度を厳しく制限する、あいまいさのない文章でなければならない。自分がこう感じるや、自分の好き嫌いなどは抜きにして、まず、自然を虚心坦懐に見て、それを正確に誰が読んでも分かる文章で記述し、そのような観察を元に、一步一步、三段論法で論理を積み上げ、世界を統一的に見通す理論を構築していくのが自

然科学の文章である。

文科系では情緒や価値観がからんでこざるを得ないだろうが、そういうものにはとらわれず、さばさばとした明晰で論理だったものを書く能力が、理科では必要とされる。しかし、この能力は、理科系にだけ必要というわけではない。

生物教育では、よくスケッチをさせる。スケッチでは、自分の目でよく見て線を引く。ところが自然界では、どこが境界線かはつきりしないことが多い。だから、ここが境だと、自分で判断を下しながら描いていく。つまり線を一本引くごとに、自分なりに世界を定義して世界を再構成していく。

生物学についての記述とは、言葉による自然のスケッチなのであり、一行の文は、スケッチの一本の線に対応する。一行書くたびに、ここはこうなっているのだと自身で納得して表現を決定し、記述した内容の客観性を自己の責任で保証し、そのような文をつらねて自然を定義していく。こういう、一行ごとに決断と責任を伴うのが、理科系の文章なのである。

文科系の文章にも、もちろん責任は存在する。ただし、理科系の文章の責任は全体としての内容に対するものである。理科系の場合はそれもあるが、加えて、個々の文それぞれについて、表現の客観性を保証する責任がある。責任の範囲は狭いけれど、どの一行も、責任を伴わない文はないのであり、それらが集まった責任の塊のようなものが理科の文章だと言えると思う。

このところを理解していなかったために起きた、小さな悲劇を紹介しよう。私の研究室にいた、ある大学院生。彼は（実験などそっちのけで）パソコンの前にかじりつき、チャットば

かりをやっていた。その彼が修士論文を書く時期となった。これだけ大量の文章を毎日書いているのだから、書くほうは何とかなるだろうと、まわりは思っていたのだが、いざ取りかかってみると、まったく書けない。

これには驚いた。一番びつくりしたのは本人で、ショックのあまり大学に來なくなってしまった。

書くと言っても、チャットと自然科学の文章は、大いに異なるのである。チャットは、たんに感想や思いつきの短いコメントをやりとりしているだけであり、現実をきっちり記述するわけでもないし、論理だった考えを滔々と述べるものでもない。彼の場合、虚心坦懐にものを写生する文章も、息の長い論理立った文章も書いたことがなかった。

しかしそれ以上に、彼にとつての問題は、責任だった。チャットは匿名だから、無責任に書き散らせる。ところが論文は一文一文に責任をとらねばならない。彼の仕事は、ウニの足（管足）の形態学である。ここはこうなっているのだと、一行ごとに正しいことを書かねばならない。ところが、本当にこう言い切れるのか、ある個体ではこうだが、他の個体ではどうなのか、などと考え始めると、簡単に、こうだ、と書き記すことができない。責任ある文章をきちんと書くこうと思ったとたん、この学生は、一行も筆を進められなくなったのだった。

自分の好き嫌いだけ書いている分には、気楽なものであり、責任は一切ない。抽象的な議論も無責任にできる。携帯メール、チャット、匿名のホームページ等々、今の若者の文章は、責任を伴わないものばかりである。

このようなご時世だからこそ、自然をよく見てそれを言葉に



本川達雄（もとかわ たつお）
1948年、宮城県生まれ。東京工業大学大学院生命理工学研究科教授。専門は生物学。現在、文部科学省中央教育審議会国語専門部会委員を務める。歌う生物学者としても知られ、テレビ出演も多数。著書に『ゾウの時間ネズミの時間』（中公新書）『時間～生物の視点とヒトの生き方』（NHKライブラリー）などがある。光村図書「くごく2上」掲載の「サンゴの海の生きものたち」は、教科書のための書き下ろし。

する訓練を、国語教育の中で行って欲しい。それを通して、言葉とは、一つひとつに責任を伴うものであるということをはつきりと身につけさせていたきたい。このままでは、無責任な言葉の氾濫する中で、子供たちはみな、無責任な人間に育っていくのではないかと私は憂えている。

国語で身につけた力を算数に生かす

筋道を立てて考え、 情報を取捨選択する力を（四年）

公立小学校教諭 矢嶋 康

1 はじめに

子どもたちの多くは、算数で、いわゆる「文章題」を苦手としている。理由は何か。

『フィンランド国語教科書 小学4年生』（※注）の中で、登場人物のミッコが、自分の悩みについて話す場面がある。

「算数の文章題を読んでいると、頭の中がごちゃごちゃになって、何から始めたらいいのか、わからなくなっちゃうんだ。文章を読まずに数字だけ見て、適当に答えを書くこともあるけど、それでも、けっこう答えはあっているんだよね。でも、やっぱり、ちゃんと文章を読んだほうがいいのかな。」

このミッコの言葉には、二つの課題が示されている。一つは、必要な情報とそうでない情報とを取捨選択できないということ、もう一つは、論理の展開の把握ができないということである。「頭の中がごちゃごちゃになって」しまうのは、筋道が見つけられなくなっているからにほかならない。

2 国語で「情報を取捨選択する力」を身につける

「情報を取捨選択する力」は、どの教科で身につけるべきか。それは、国語であろう。小学校学習指導要領にも、三・四年の内容として、「読むこと（1）イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと。」と示されている。

自分が直面している課題を解決する目的で、中心となる語や文をとらえるためには、情報を取捨選択して獲得する力を身につけることが必要となる。

ただ、改めて考えてみると、これまで国語の授業、特に「説明文の読み」の授業の中で、「必要な情報は何か」とともに、「不必要な情報は何か」を見極めていく力をつけるための指導は、積極的に行われてきたとは言えない気がする。

教えていないことは、子どもたちにはできない。

そこで、この情報は必要なのか、あるいは不必要なのかということを考えていく活動を取り入れていきたい。そのためには、まず、話題は何か、どのような論の展開なのかということが把握できなければならない。そのことを抜きにして情報を取捨選択することは不可能だからである。

3 国語と算数で「筋道を立てて考える力」を身につける

「筋道を立てて考える力」がないと、子どもたちは、どんな情報を選択してよいのかわからない。

算数の文章題の解決に必要な「筋道を立てて考える力」は、

二つの力に分けることができる。

一つは、算数の当該単元の中で子どもたちが学んでいく数理の力である。算数で課題を解決するための数理が獲得できていなければ、いくら話題や聞かれていることがわかっていても解決することはできない。

たし算を学んでいるときのことを考えてみたい。一つのものともう一つのもの合計がいくつかという問題を解決するには、加法を使うということがわかり、ゆえに、「りんご三つとかき五つを『合わせて』いくつでしょう。」と言ったときの『合わせて』という言葉がキーワードとなり、子どもたちは課題を解決していくことができる。ここでは、加法の数理が展開されているのである。

もう一つは、国語で身につけるべき論理性である。「話題提示・具体例・結論」といった筋道を立てて考える力である。国語でつくっておくべき文章読解力をもたなければ、算数の文章問題の中でキーワードが出てきても、それを整理できず、問題を解くことはできない。

算数の文章題を解決するには、この二つの力が必要なのである。

そこでまず、国語の時間に、話題となっていることは何か、どんな結論を述べたいのかということをつかみ、表す力を身につけさせたい。この力がもとになり、必要な情報と不必要な情報とを分けて考えることができるようになる。その上で、算数の数理をあてはめると、文章問題の解決にもつながるのである。加えて、算数のシンプルな数理は、具体例を出して結論を述べるという説明的な文章の把握や、論理的に記述する力へと有効に働く。したがって、

○文章の話題・結論を把握する。

○必要な情報と不必要な情報を分ける。

○解決に必要な数理を適用する。

といった道筋を子どもたちが獲得できれば、国語・算数の教科をつなげていく中で、国語で情報の取捨選択能力をつけ、算数でこれを生かすことができる。両方の教科で、筋道を立てて考える力を補完し合えることにつながるのである。

4 説明文「『かむ』ことこの力」（四年）の実践

筋道を把握し、情報を取捨選択して、課題を解決するための活動を、実際に行った授業をもとに示す。説明文「『かむ』ことこの力」（四年上）の学習場面である。

この文章は、第一段落で、「かむ」とは「どういうことか」「よくかむと、どんないいことがあるか」という話題を提示し、第二段落から第八段落までで具体例を示し、第九段落で「かむことは体全体にかかわる大切な働き」をしていることを述べるという、典型的な説明文のスタイルをもっている。今回のねらいに合った文章といえる。

（1）文章の話題・結論を把握する。

「これは何についての話ですか。」（話題）という問いかけを子どもたちにする。ここでは、「かむって、どういうこと。」「よくかむと、どんないいことがあるの。」という話題提示をしていることをつかませる。続いて、第九段落では、かむことは、「体全体にかかわる大切な働き」をしていると結論づけていることをつかませる。

ここで、結論をつかませるのには意味がある。それは、話題と結論との間にある具体例の中で、着目すべき点に意識づけさせるためである。このような読み方を意識しておくことは、「サクランソウとトラマルハナバチ」（五年上）のような具体例が長く展開されている文章を、筆者の意図を探りながら読むためには有効となる。

その上で、話題に対して具体例の中で示されている答えは何かを見つけることを課題とすることで、一つ一つの具体例の段落に子どもたちの意識を向ける。

（2）必要な情報と不必要な情報を分ける。

具体例が示されている第二～第八段落では、キーワードを見つけさせることで、情報選択の力をつける授業を行う。

第四段落を例にとってみたい。必要な情報と不必要な情報を分けることを、次の三つのステップで行い、ふるいの目をだんだん細かくしていくのである。

- ① ほかの言葉に代わってもいいものを指摘する。
- ② 話題に対する答えとして、どうしても必要な言葉を探す。

- ③ その中で、ほかの言葉の意味に含まれてしまうものを外す。

まず、第四段落の本文を提示する。

「また、かめばかむほど、だえきもたくさん出てきます。だえきがたくさん出るとは、消化を助けるだけでなく、歯の健康にとっても大事です。ふつう、だえき是一日におおよそ一リットルほど出ます。大量のだえきは、歯の表面のよこれやばい菌などをあらいい流して、虫歯になるのをふせぐ働きをし

（3）解決に必要な数理を適用する。

国語で筋道をつかみ、情報を取捨選択する力をつける活動を行っておくことは、算数の時間での文章題の解決にも生きる。例えば、

「たけしさんは、山本ケーキ店に行きました。そこで、たけしさんは、一八〇円のショートケーキと、九〇円のオレンジジュースを買い、店員さんに五〇〇円玉をわたしました。たけしさんは、いくらおつりをもらったのでしょうか。」

という問題に対して、まず、話題を把握する。「これは何についての話ですか。」（話題把握）、「何をいくら買って、いくらわたしたのですか。」（具体例）、「何を聞かれていますか。」（結論）を、簡単に整理する。次に、前に掲げた三つのステップを適用する。

- ① ほかの言葉に代わってもいいものを指摘する。

「たけしさん」は、おつりを求めるといふ課題に対しては必要ではない。「次郎さん」や「よしえさん」に代わってしまってもよい。

- ② 話題に対する答えとして、どうしても必要な言葉を探す。

子どもからは、「一八〇円」「九〇円」「五〇〇円」「おつり」が出てくる。この段階では、「一八〇円のショートケーキ」も残っていてよい。

- ③ その中で、ほかの言葉の意味に含まれてしまうものを外す。

おつりを求めたいとき、「一八〇円」は必要であるが、「ショートケーキ」は「一八〇円」のものは何かという説明にあたる。したがって、このステップを入れて、四つの情

ます。また、だえきには歯と同じ成分がふくまれていて、歯の表面にできた初期の虫歯に対しては、元の健康な歯にもどるのを助けてくれます。」

さらに子どもたちには、「だえき」「歯の健康」「あらいい流す」「一日一リットル」の四つの言葉を提示する。

この中で、「どうしても必要な言葉」、つまり「よくかむと、どんないいことがあるか」に対する答えになる言葉を探させる。話題を常に意識させることが大前提になるのは、言うまでもない。

- ① ほかの言葉に代わってもいいものを指摘する。

「一日一リットル」というのは、「二日で二リットル」に代えても文章の意味は変わらない。また、話題に対して必要な答えでもない。

- ② 話題に対する答えとしてどうしても必要な言葉を探す。

ここでは、「だえき」「歯の健康」に加えて、「あらいい流す」が入ってもかまわない。

- ③ その中で、ほかの言葉の意味に含まれてしまうものを外す。

「あらいい流す」は、「だえき」の機能を示している言葉である。したがって、「だえき」に含まれる。授業では、子どもたちにいきなり示してもわからないので、動物・牛・犬を例に挙げ、牛や犬が動物に含まれるということを経験してから行なった。

このようにして、自分が調べていることに対して、必要な情報とそうでない情報を峻別し、分類する活動を行うことで、情報選択の力を養うことができる。

報に絞り込まれる。

ここまでで、子どもたちは、話題がわかり、具体例を整理し、聞かれていることを把握することができた。そこで、解決するためにはどのような数理を用いればよいかを考えさせるのである。

5 終わりに

国語で、ことばの力として、「筋道を立てて考える力」「情報を取捨選択する力」を身につける。このことをもとにして、算数の文章題では数理をあてはめる。その数理はまた、国語の力としても生かされていく。

必要か必要でないかという尺度で「情報を取捨選択する力」をつける活動は、国語の授業としても今以上に促進されるべきである。国語で身につけた力は、例えば算数の文章題を解くというような他教科の場においても、間違いなく生きるからである。さらに、日常的な生活の場においても、必要な情報とそうでない情報を検討していくものさしをもつことへとつながるはずである。

※注Ⅱ「フィンランド国語教科書 小学4年生」

メルヴィ・バレ／マルック・トゥリネン／リトバ・コスキパー
著 北川達夫&フィンランド・メソッド普及会訳・編（経済界）

「第2部 イテテスト勉強のやりかた」より引用した。

理科学習ではぐくむ読解力

実験から得た情報を整理し、 考察・感想を述べる（六年）

新しい指導を考える会

1 理科学習の特性と「読解力」育成

文部科学省『読解力向上に関する指導資料―PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向―』（平成十七年十二月）では、テキストを理解する力や自分の考えを書き表す力の向上など、指導改善の方向を示しているが、このことについて、理科は大きな役割を果たす教科であると考ええる。

理科では、自然の事物や現象に働きかけ、そこに内包される性質や規則性を明らかにしていく。その過程では、観察や実験で得られる視覚的なデータや実験で得られる数値的なデータなど、多岐に渡る「非連続型テキスト」が資料として扱われる。それらを自分なりの見方・考え方で整理し、関係づけ、意味を見いだし、結論へと至るのである。こうした理科学習の特性を十分に生かした指導を展開するならば、「読解力」育成に大きな成果を上げることが可能である。

2 「読解力」をはぐくむ理科単元の構想

「読解力」が育つ基盤は、自ら問題を見つけ、自ら考えて問題を解決したり、説明したりする学習活動である。そこで、次の四点を考慮し、問題解決型の単元を構想する。

(1) 日常生活にかかわる場面を設定し、その中で自然現象に興味・関心が高まるような問題提示をする。

(2) 自分なりの経験や直感を生かし、実験方法を自分なりの着眼点をもって創意・工夫できるようにする。

・観察や実験の着眼点、検証すべき事項が明記されるような仮説を立てる。

・観察・実験は、可能な限り個別に取り組めるようにする。
(3) 観察したことやわかったことを表現するには、どのような表現方法がよいのか、自分なりに考え選択できるようにする。また、考察では、単にわかったことを書くのではなく、観察や実験の結果を根拠として論理的に考えを述べられるようにする。

・表現内容に応じて、文や図・表などの表現方法を選択する。
・考えとその根拠となる部分とが、はっきりとわかるような文章を書く。

(4) 単に結論を出すための観察で終わることなく、観察すること、さまざまな気づきや発見、驚きや喜びをもてるようにする。

・単なる結果だけではなく、変化の過程にも十分着目し、観察する。

・現象をじっくり見て、五感を働かせた細やかな観察をする。

3 培うべき力の明確化

問題解決型の単元を構想することで、自ら考え、自ら結論を導き出す道筋はできる。しかし、そうした自力解決はたやすいものではない。解決に必要な力を子どもたちの中に培うことが前提であり、その培うべき力を指導者が明確にとらえ、指導の機会をあらかじめ準備しておく必要がある。以下に示す事項は、本稿で後に紹介する「水溶液の性質を探ろう」の学習に関する培うべき力である。

(1) 問題を見つける力

・目に見えない溶質を、目に見えるようにしようと考ええる。

・水に気体が溶けているのではないかと推論する。

・溶質（鉄）の変化の原因に疑問をもつ。

(2) 問題解決の方法を工夫する力

・溶質を取り出す方法や、取り出した溶質の性質を調べる方法を工夫する。

(3) 観察・実験の結果を表す力

・五感を働かせ、現象を細かに観察する。

・観察結果を表す方法を工夫する。

・観察結果を効果的に表せるように、絵や文など表現方法を工夫する。

(4) 自然の事物、現象を関連づける力

・観察・実験の結果を根拠に、水溶液の性質や溶質の変化について実証的に考察する。

・現象について、発見や感想を自分なりに表現する。

4 「水溶液の性質を探ろう」（六年・理科）の実践

ここでは、六年理科単元「水溶液の性質を探ろう」におけるY児の実験記録と単元の終わりに書いた文章を紹介する。

実験の概要は、質的に変化したスチールウールを観察し、その変化の原因を探るために、スチールウールを塩酸の中に入れ、変化の様子を調べるといふものである。

実験に当たっては、まず「目的」「仮説」「方法」を項目とする簡単な実験計画を立てた。実験の目的を明確にし、目的に合った仮説を立てることで、自分なりの見方・考え方で実験を進められるようにした。また、実験は各自で取り組むことを基本とし、それぞれの発想や思いに合った方法を考えた。

次に、実験開始後は「観察」「考察」「感想」の項目立てにしたがって記録を取り、考えをまとめていくようにした。時間は十分に取られ、単に「スチールウールが塩酸に溶けた」というような観察や結論で終わるのではなく、変化の過程にも着目し、五感を働かせた観察を行うように心がけさせた。そして、実証的に考察するとともに、起こった現象に対する発見や驚き、想像も入れるよう、文章記述を工夫させた。

以下は、実験記録と、単元の終わりに書いた文章「目に見える現象、見えない現象の世界」の実践である。

◆実験記録（Y児の例）

1 目的

先生からもらった茶色になっているスチールウールが、なぜ、そうなってしまったのか、原因を調べる。

2 仮説

水溶液の中の食塩水と石灰水、そして塩酸が気になるので、それぞれを試験管の中に入れて、スチールウールを入れてみる。もし、この中のどれかが先生からもらった茶色のスチールウールと同じ形や色になったら、それが原因ということがわかる。もし、どれも先生からもらったスチールウールと同じにならなかったら、その他の原因であることがわかる。

3 方法

(実験方法を示した絵図：引用者略)

4 観察

◇塩酸：入れたとたんに、白いあわがたくさん、スチールウールから出てきた。最初はくさくさなかったが、あとから、鼻がつんとするようなにおいがしてきた。ガラスほうでスチールウールをおくに落としたら、また、白い細かいあわが出てきた。ときどき、リズムにのって大きなあわが出る。あわは下にはいかない。なぜなら、あわは気体だからだ。

◇石灰水：特別に変化はなかった。ふって見たとき、2、3個あわが出てきただけだ。もう一度ふってみたが、もうあわは出なかった。ちょっと時間をおいて、あとで見ることにする。

◇食塩水：そういえば、塩水というのは、ものを浮かせる力があるということを出した。最初、何度スチールウールを押しても、浮いてきた。でも、なぜか、30秒くらいしたら急にしずんだ。気のせいかな、スチールウールが固まったような気がする。もうちょっと様子をみてみよう。その後、時間がたって、働き続けているのは塩酸だけ。塩酸の中に入れたスチールウールは、先生からもらったものと形

が似てきたように見える。でも、まだ、塩酸が原因とは言えない。ほかの二つは変化がない。

◇追加実験をした。オキシゾールもやってみた。すごい変化があると言っていた人たちがいたからだ。あまり変化はなかったが、時間がたつと水が茶色になってきた。

5 考察

原因は塩酸だと思う。石灰水と食塩水はスチールウールが銀色に光っていて、最初と変わりなかった。だけど、塩酸だけは、黒くなって、ちりちりがなくなった。それに、くさいにおいも先生からもらったものとそっくりだからだ。ただし、色の問題が残る。塩酸に入れたスチールウールは、先生からもらったものみたいに茶色になっていない。茶色になったのは、オキシゾールなのだ。もしかしたら、原因は、オキシゾールかもしれない。しかし、大発見をした。先生からもらったスチールウールの茶色のさびを水で洗ってとつてみたら、塩酸とそっくりだということがわかった。

オキシゾールの茶色をとつてみたら、銀色だった。やつぱり原因は、塩酸ということになる。

6 感想

私はとても、やんだ。「塩酸?」「オキシゾールじゃないかな。」と言う人たちがいたから。

でも、やつぱり自分がやった実験の結果から考えるのが一番よいと思い、いろいろと試してみた。

オキシゾールは、においもないし黒くもならない。自分で「おつ、そうだ。ぜったいそうだ!」と思ったときは、とてもうれしかった。話し合いでは、そういうところを話し合っ

◆「目に見える現象、見えない現象の世界」(Y児の例)

これから、私たちアルミニウムは実験に使われるのですが、何の実験だと思えますか? それは「うすい塩酸にアルミニウムを入れるとどうなるか」です。私は、塩酸の中に入りたくはありません。それは、私たち金属の仲間、スチールウールが塩酸に溶かされてしまうのを見たことがあるからです。

塩酸に入ったとたん、スチールウールから、さかんにあわが出てきました。音を聞いてみると「ジュ、ジュ」というような音が聞こえてきました。においは、とてもくさかったです。三時間近くたつと、もうスチールウールは溶けてしまい、黒っぽい灰色の短い糸のようなものが浮いているだけになってしまいました。

あわは、スチールウールから溶けたものが気体になって出てきたのだと思います。塩酸を蒸発させると、レモン色の粉が出てきました。さわってみるとざざらしていました。茶色で角ばったものも混じっていました。その粉は電気も通さず、磁石にもくっつきませんでした。最初のスチールウールとは、ぜんぜん違うものでした。塩酸は、自分の力でどんなスチールウールをあや別な物に変えて溶かし、最後には粉々に溶かしてしまうのです。このようにこわいものはこの世には、ほかにないと思います。

Y児は、スチールウールが各種水溶液に反応する様子を観察し、泡の発生、におい、音、色の変化と、五感を尽くしたデータ収集を行っている。実験初期の段階においては、泡の発生やにおい、音に関するデータを、スチールウールに変化が生じているか否かを判断する材料として用いていることがわかる。また、探求の段階では、「茶色になったスチールウールが、なぜ、そうってしまったのか、原因を調べる」という実験目的のもと、とりわけ色に関するデータに着眼し、変質前と変質後のスチールウールを比較検討し、それを根拠に推論を重ね、結論を導き出している。

こうした実験記録から、Y児が問題意識をもち、自分なりの発想による実験方法で自然現象に働きかけていること、そして、自分なりの見方・考え方で問題解決に挑み、自らが到達した結論を理由や根拠を示しながら論理的に説明しようとしていることがわかる。

5 理科学習へのさらなる期待

今回の実践事例は、視覚的にとらえた観察データから目的に応じて情報を整理し、意味づけて論証していくというものであり、「読解力」を培う有用な機会になったと考える。

理科では、気象データや物理的な測定データ、生物の変容データ等々、さまざまな「非連続型テキスト」を対象に自らの考えを構築し、表現していく。それぞれの単元で培うべき力を具体化し、問題解決的な学習を展開するならば、毎時間が「読解力」育成に直結する学習になるといっても過言ではない。

国語と総合的な学習の時間の協力

「非連続型テキスト」を読み解くための試み（五年）

新しい指導を考える会

1 これまでに欠けているものは何か

PISAでは、「読解力」を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」だと規定し、これらを支える三つの側面として、①情報の取り出し、②解釈、③熟考・評価を掲げている。

これは「読み取って得た知識や情報を咀嚼し、一度自分のものとした上で再構成する力」と言い換えられる。

確かに、これまで言われてきた「読解力」とは内容的に違う部分があるものの、その先にある「外部に発信すること」、すなわち「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の内容まで含めて考えれば、学習指導要領で示されている国語力の範囲を大きく外れるものではない。

つまり、「読むこと」の学習に「書くこと」や「話すこと・聞くこと」の学習を関わらせていくことで、既存の授業の枠組みの中でも「PISA型読解力」をつけることは可能だと

考えられる。
では、今の子どもたちに不足しているのは何か。それは、次の二つの力である。

① 図・表・グラフなどから情報を読み取る力

② 集めた情報について、それまでの自己の生活経験や、他から得られた情報などを総合して、その上に自分の考えを構築する力

つまり、情報を収集し、「網の目」のように関連づけるための力を育てる学習が必要なのである。

2 「非連続型テキスト」はなぜ読めないのか

このうち、従来の「読解力」の空白域として指摘されているのが、図・表・グラフなど「非連続型テキスト」を読み取る力である。

もちろん国語の教材にも、図・表やグラフ・挿絵などの「非連続型テキスト」を含むものは多い。国語に限らず教科書のビジュアル化は著しく、ページを繰れば、カラフルな挿絵や写真、図・表などが次々と目に飛び込んでくる。

だが、それらはあくまでも本文テキストを補助するためのものであって、それ自体を読み取るために存在するわけではない。社会科や理科などでは当たり前に取り扱われる図・表・グラフだが、複数のグラフや写真・図・表などと合わせて考えを導き出したり、他教科と意識的に関連づけて考えたりする機会は少ない。

つまり、子どもたちは多くの「非連続型テキスト」に囲まれながら、それを生かすための学習は行っていないということだ

4 単元「人と『もの』とのつき合い方」（五年）の実践

——資料を読み、資料をもとに考える

「人と『もの』とのつき合い方」は、環境問題を題材にした説明的文章『ごみ問題ってなあに』を読み、そこで得た視点をもとに調べ学習を進める単元である。ごみについては四年生でも学習している上、総合的な学習の時間との関連性も高く、協力的な学習が進めやすい構成となっている。

ここでは、「ごみ問題」について、「連続型テキスト」である教科書本文に関連した、複数の「非連続型テキスト」を新たに提示し、そこからの情報の取り出しと解釈を通して、

○自分なりの課題を見つける。

○自ら解決の方法を探る。

○自分の言葉でその考えを表現する。

という「熟考・評価」に繋がる活動を行う。

①『ごみ問題ってなあに』を読み、「へえー。」と思ったことをノートにまとめ、発表させる。

・江戸時代はごみを出さない社会だったということ
・ペットボトルを魚とりのうきに使っていること
・日本人が一人あたり一年で三六〇キログラム以上ごみを出していること……などと記入していた。

②「一人一日一キロ」というのがどのくらいの量か、実際にごみを一キログラム袋に入れたものを示し、順に持たせて実感させる。

・「重い。」「そんなに重くない。」「ばく、一日にこんなにごみ出してないよ。」などの感想が聞かれた。

ある。こうした実情を考えると、「非連続型テキスト」を読めないのは当たり前と言えるかもしれない。

現在の枠組みの中で「非連続型テキスト」にかかる読解力を育成するためには、教科を横断した学習を視野に入れ、国語と他教科の学習との協力の中で、不十分な部分を補いながら行っていくのが適切だと言えるだろう。

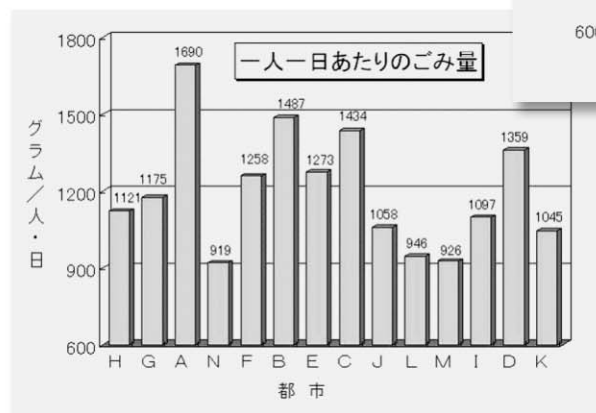
3 「熟考・評価」の力を育てるために

他教科との協力は、教科担任制という制約もあることから、一般的に中学校で行うのは難しい。「非連続型テキスト」を読み解く力を育てるための学習は、必然的に、小学校で積極的に行われるべきだということになる。

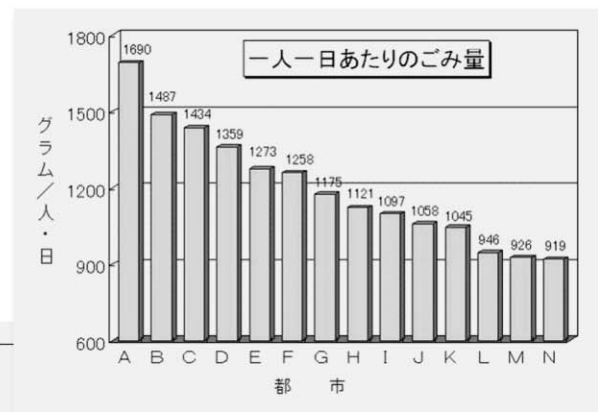
ただし、高学年の児童にとっても「熟考・評価」のハードルは高い。児童が行う調べ学習の成果は、インターネットや書籍から収集した情報の羅列になりやすく、考察も限りなく感想に近いものになりがちである。ただ、それは知識や生活経験が乏しく、収集した情報を関連づけたり再構成したりする力がまだ足りないからにすぎない。

したがって、将来的に「熟考・評価」の力を身につけていくためには、「情報をネットワークさせる力」を育てるためのトレーニングが必要だと考える。

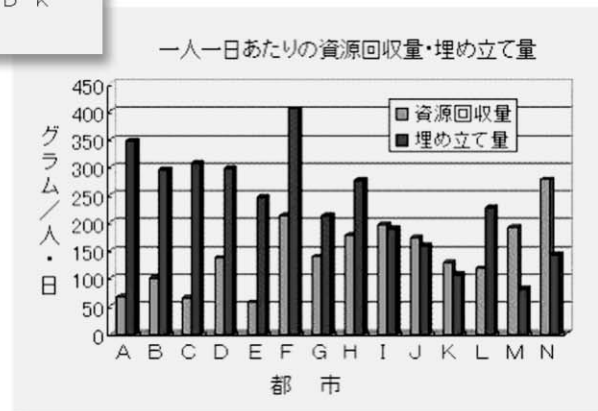
そこで、国語と総合的な学習の時間との協力を視野に入れて、「非連続型テキスト」を読み解くためのトレーニングになるような学習について考えてみたい。



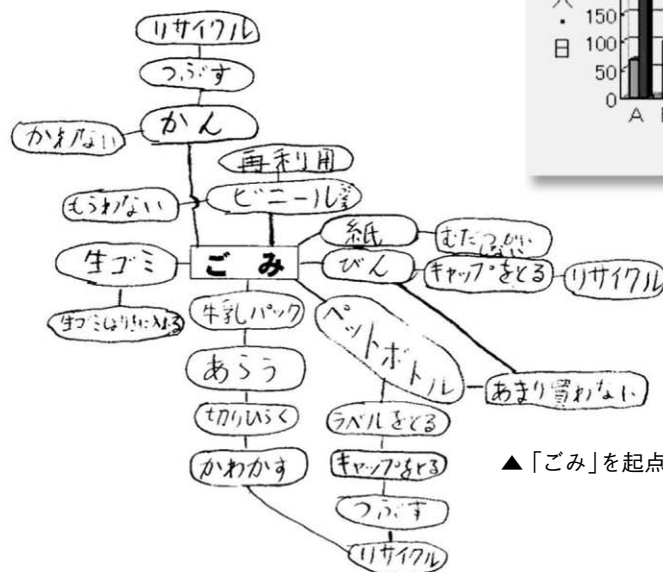
▲ グラフB (図2)



▲ グラフA (図1)



▲ グラフC (図3)



▲ 「ごみ」を起点としたウェブマップ (図4)

③ 日本の大都市の一人一日あたりのごみ排出量の資料を提示し、どの都市のものをか予想させる。

○ グラフA (図1) を示し、ワースト3とベスト1がA、Nのどの都市かを予想させる。

・「えー」「わからない。」という児童が多かったが、数名が人口との関わりに着目した発言をした。

○ ヒントとして、「人口が多い都市のほうが、ごみ排出量が多くなりやすい」ということを知らせる。

・「わかった!」という声が出たが、「一位は東京。」「二位は…大阪?」など、はつきり答えられない児童が多かった。

○ 人口が多い都市順に並べ替えたグラフB (図2) を示す。

○ 「人口がとても多いのに、一人あたりのごみ量がとて少ない都市はどこか。」と問う。

・ グラフを見ながら、すぐに「あつ、Nだ。」「ほんとだ、Nだ。」という発言が開始する。

○ N市は人口二百万人以上で第四位の都市だが、一人あたりのごみの量は全国一少ないことを確認する。

④ この年の全国平均が九八五グラムであることも付け加える。(グラフは平成十四年度の資料をもとにした)

○ N市の一人あたりのごみ量はなぜ少ないのか、資料をもとに考えさせる。

○ グラフC (図3) を提示し、N市と他の都市と比べて気がついた点を発表させる。

・ 「N市は資源回収量がいちばん多い。」「埋め立て量が多いところは、資源回収量が少ないです。」などの発言があった。

・ 「資源は回収したらごみにはならないの?」「埋め立てたごみは『ごみ量』に入るの?」という質問があったので、教師が答えた。

⑤ ごみを減らすために、どんなことをすればよいかを考えさせる。

○ 「資源回収」とは何をすることか、知っていることを発表させる。

・ 「廃品回収」「リサイクル」「ペットボトルのリサイクル」などの発言があった。

○ ごみと資源回収・リサイクルについて、わかったことや知っていることなどを、「ごみ」を起点としたウェブマップ (図4) にまとめさせる。

○ できあがったマップをもとに、ごみを減らすために自分たちが何をすべきか、考えをまとめて書く。

○ その後、教科書P74以降を参考に、発表などの活動を通して考えを交流させる。

ほかにも、「非連続型テキスト」を取り入れる活動として、道具や図工の作品などについて、その使い方を説明する「取り扱い説明書」を作る学習などが考えられる。自分が「書き手」となって、実際に、だれかに「説明書」にしたがって道具を使ってもらうことで、「読み手にとって、どんな図や説明が必要か」を実感させることができる。

日ごろ何気なく見ているパンフレットや図版などが、教材としての可能性を秘めているのである。

子どもたち一人一人の国語の力を伸ばすには、どんな授業を考えればいいのでしょうか。
ここでのヒントをもとに、明日からの授業にチャレンジしてください。

さあチャレンジ!

子どもを伸ばす国語授業のヒント 2

学習場面に合わせた 板書指導の工夫

前青山大学講師 岩崎 保

毎時間、どの教科でも、黒板に学習の目的や内容を書かない先生はいないでしょう。板書は、教師と児童が学習の意図を共有して、学習展開を有効に進める必須条件です。一斉授業の中で、一人一人の児童が学習の問題や方法を認識し、考え、理解し、作業するのに最も頼りにするのが、視覚を通じた板書です。とりわけ、言語活動を学習の主体にする国語教育では、「先生の背中を見て育つ」児童にとって、板書する教師の姿勢や文字の形、文章の確かさに納得して学習意欲を高めていくことは確かです。

一 板書の工夫は学習内容と活動をつなぐアイデアから
「いつ、どこで、何を、どのように」板書するかによって、活用する教具が変わってきます。白・赤・黄などのチョークを

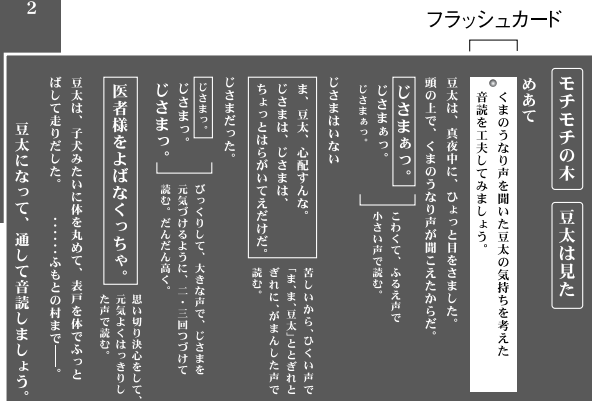
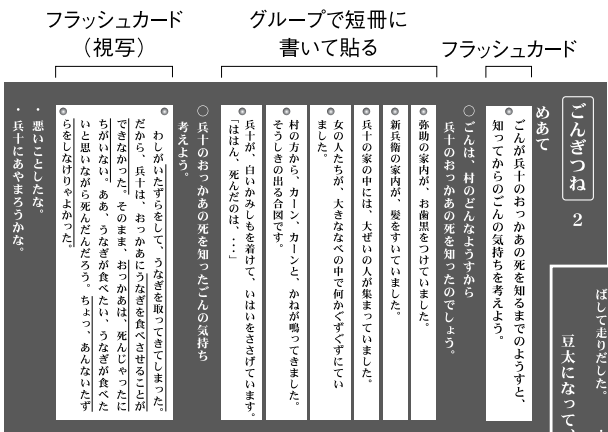
使った手書きの板書が一般的ですが、「学習のめあて」「主な発問」「登場人物の似顔絵・ペープサート」などは、あらかじめフラッシュカードを準備しておく、学習の効率化と児童の思考意欲を促します。このほかにも、OHP、OHC、図・表や写真などを必要に応じて組み合わせると、映像機器を見慣れている児童の理解を高めます。自身の学級作りの願いや児童の関心や実態を理解したうえで、板書計画を立てましょう。

(1) 黒板に余白を作って学習課題を解く工夫例
黒板全面を文字で埋め尽くすのではなく、板書に余白を作り、児童の思考を促すゆとりスペースにしましょう。(例1)は、『ごんぎつね』(四年)で、学習課題を考えるための板書例です。真ん中のスペースには、児童がわかったことを短冊に書いて黒板に貼付します。左のスペースには、「ごんの気持ち」が書かれている文章」を視写するためにフラッシュカードを貼ります。

(2) 音読の仕方を考える板書の工夫例
音読の仕方を考える学習でも、板書を工夫することで、どのように読むか、児童が豊かに想像できます。(例2)にある『モチモチの木』(三年)、『豆太は見た』の場面には、「じさまあつ」と「じさまつ」と二つの同じ言葉が出てきます。その先にある「医者様をよばなくっちゃ」までの「豆太の心の変化」を音読で味わう場面として、その時のじさまの声と合わせて、どのように読み分けるかを話し合っ板書する事例です。

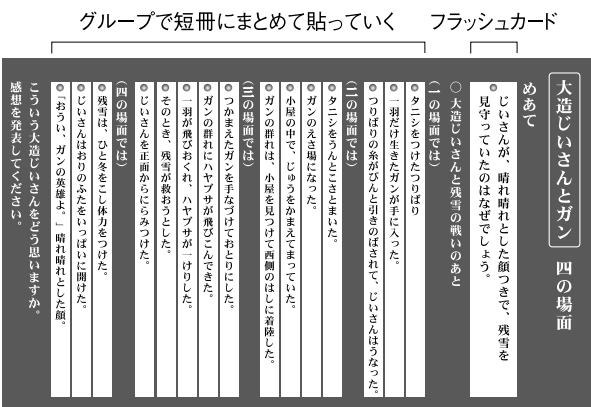
(3) 学習のまとめを児童が作る板書の工夫例
(例3)は、『大造じいさんとガン』(五年)の読解の最後で、児童が学習のまとめを作る際の板書の例です。学習課題はフラッシュカードで黒板右側に掲示します。児童はグループごとに、大造じいさんと残雪の戦いの跡を分担して短冊に書き、行動の順に黒板に貼って、経過や感想を発表します。

〈例1〉『ごんぎつね』(4年)



〈例2〉『モチモチの木』(3年)

〈例3〉『大造じいさんとガン』(5年)



あらかじめ設問は板書しておく

(4) 低学年に文章の構想を立てさせる板書の工夫例
低学年の児童に、遠足に行ったときのことを文章にまとめさせる際、「楽しかったことを、思い出シシートに書いて出してください。」と言って、「書きたいこと集め」のシートを児童に配布し、記入させます。そのうえで、ある児童のシートを短冊に書き写して、全員のための例として黒板に貼ります。黒板に貼るときは、児童に確かめながら、「楽しかった順番」に並べるようにします。先頭に来る短冊が、「いちばん楽しかったこと」になるので、これを題名にするよう助言します。あとは、時間の順に書けばいいことを伝えれば、児童は不安なく構想を立てることができます。

(5) 低学年に物語のあらすじを理解させる板書の工夫
低学年の児童に、物語のあらすじが捉えられるようにするには、発話によるやり取りをしながら、それを黒板に書いたり、フラッシュカードを掲示したりして、物語の全体構造(人間の関係)をイメージ化させるようにしましょう。次に掲げるのは『大きなかぶ』(二年)の例です。

T 先生といっしょにお話を読みましょう。初めにタネをまいたのはだれですか。そして、かぶはどうなりましたか。
C おじいさんです。大きな大きなかぶになりました。
T そうでした。さて、「うんとこしょ、どっこいしょ。」(フラッシュカードを掲示する)は、みんな力を入れて読んでください。初めにこう言ったのはだれですか。
C おじいさんです。
T そうですね。(児童が描いたおじいさんの絵を貼り、その下に「おじいさん」と書く)
このように同じ手順で続けて板書を完成させ、「あらすじ」という言葉と一緒に、全体の構想を意識させていきます。



二 ワークシートと二 体化させ、板書作りに児童を参加させる
場面を読み比べ、学習を組み立てる際、どのような板書の工夫があるか、「一つの花」(四年)を例に考えてみたいと思います。初めに、題名から物語を予想し、教材文を通読したり範読を聞いたりして感想を話し合い、登場人物の思いを読み比べるという学習展開になりますが、板書とワークシートを一体化させると、より有効な学習が可能となります。

(1) 第一場面での板書例

〈例4〉は、三時間目に用いる板書の例です。「ゆみ子が最初に覚えた言葉から、どんなことが分かるでしょう。」と発問して、それを書いたフラッシュカードを黒板に掲示します。一斉音読をさせてから、ワークシート「1」を配ります。(ワークシートは、光村図書「小学校国語ワークシート集」にあるものです。課題・設問は、板書例とほぼ同じです。)

①の設問は、「第一場面の書き出しの文を書き写しましょう。」と指示します。この視写はのちの読みのキーワードになりますから、「書き出しの文」と板書し、児童の書写速度に合わせて、ゆつくり板書します。全員が正しく書いたことを確かめてから、自分で書いた文を一斉音読させ、文の正しさと内容を捉えさせます。視写も読解指導です。そして、ゆみ子の幼さや食べ物以外に思いが働かない様子を実感する読みとして、「物語を読む大事なカギになる言葉」キーワード」と板書し、説明します。

②の設問は「この言葉を、ゆみ子が最初に覚えたのはなぜでしょう。」と発問してから、手書きで板書します。すぐにわかる児童はどんどんシートに書き始めるでしょう。そこで、手の進まない児童のためにも、いったん全員の手を休めさせ、「戦争がはげしかったころの様子」と書いた「フラッシュカード」を黒板に掲示します。わかった児童には、短冊に書いて黒板に

貼らせませす。板書に、児童も参加するのです。それを見て感想を話し合わせ、その内容を教師が手書きで板書し、キーワードを支える大事な事柄として理解させます。ゆみ子が「一つだけちようだい」を覚えた理由については、多くの児童の発言を取り入れて板書し、全員が納得したのを確かめてから次に進みます。

③の設問は「『じゃあね、一つだけよ。』と言って、自分の分から一つ、ゆみ子に分けあたえるお母さんは、どんな気持ちだったでしょう。」と発問して、「まとめ・お母さんの気持ちを考える」と書いたフラッシュカードを掲示します。この発問には、児童の個性や体験によって想像の仕方に違いがありますが、発言を簡略に板書するに留め、同じ思いの友達もいることを理解させながら、自分のシートの記述を見直させましょう。

(2) 第二場面での板書例

〈例5〉は、七時間目の板書の例です。二場面目の最後の学習です。ここでのめあてとして、「ゆみ子に一輪のコスモスの花をわたしたお父さんの気持ちを想像しましょう。」と発問して、それを書いたフラッシュカードを掲示し、ワークシート「4」(前に同じ)を配ります。

①の設問は、「泣きだしてしまつたゆみ子に、お父さんは、どんなことをしてあげましたか。また、そのときに言った言葉を書きましょう。」と一斉音読して、「お父さんがしてあげたこと」「お父さんが言った言葉」と二つに分けて板書し、児童の記載を確かめながら指名して発言させます。前は「プラットホームのごみすて場のような所から一輪のコスモスを見つけてきてゆみ子にわたしました。」とまとめ、あとは「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」と板書しておきます。物語のキーワードとして押さえるのです。

②の設問につなげて「『大事にするんだよう——。』と言ったときのお父さんの気持ち」と板書して考えさせ、ワークシートにまとめてから発表させます。児童から様々な想像が出てくることを予想して、スペースのゆとりをもつて板書していきます。

③の設問は、「一輪のコスモスの花をもらったゆみ子の様子」のフラッシュカードを掲示し、記述して発表させます。「キャットと足をばたつかせて喜んだ」と言うところにサイドラインを引いて「そのわけ」を想像して発表させることもできます。

④の設問は、「一つの花にこめられたお父さんの願い」というフラッシュカードを掲示し、記述して発表させます。それぞれに想像したことは、その児童の思いとして尊重します。的はずれな想像があつたら、個別に指導するようにしましょう。

三 よい板書の条件とは

板書には、「学習の契機を作り出す」「思考力や創造力を伸ばす手がかりを与える」「正しい認識や理解を助ける」「集団学習を助ける」など、多くの意義があります。板書は児童と教師の合作であり、その目的は「学ぶ者の立場に立つ」ことが原点です。板書すべき事項は、教師と児童がともに考え出し、作り出し、選り出していくべきものです。児童の思考の流れが大切にされなければ、「生きた価値ある板書」とはなり得ません。

最後に、どんなときに書けば、めあてに即した板書となるかを挙げておきます。

- 学習事項や目的がはっきり認識されていないとき
- つまずきがあつたり、学習展開が停滞したりしているとき
- 正確に理解させ、学習促進を図りたいとき
- 共同思考を促すきっかけを作ったり、発展させたいとき
- 比較検討や独創的な発想を生かしたいとき

〈例4〉『一つの花』(4年) 第1場面

フラッシュカード

短冊に書いて貼る

フラッシュカード

一つの花

ワークシート「1」に書いて答えましょう。

ゆみ子が最初に覚えた言葉から、どんなことが分かるでしょう。

① 第一場面の初めを書き写しましょう。

「一つだけちようだい。」これが、ゆみ子のはっきり覚えた最初の言葉でした。

○ 戦争がはげしかったころの様子 (発表)

○ おまんじゅう、キャラメル、チョコレートもない

○ おやつどころではない

○ お米の代わりにおいも、豆、かぼちの配給

② この言葉を、ゆみ子が最初に覚えたのはなぜでしょう。(発表)

③ じゃあね、一つだけよ。——と言って、自分の分から一つゆみ子にわたしたお母さんの気持ち (発表)

○ まとめ・お母さんの気持ちを考える

お母さんは、かわいそつと思つて悲しかった。

〈例5〉『一つの花』(4年) 第2場面

フラッシュカード

フラッシュカード

フラッシュカード

一つの花

ワークシート「4」に書きましょう。

ゆみ子に「一輪のコスモスの花をわたしたお父さんの気持ちを想像しましょう。

① 泣きだしてしまつたゆみ子に、お父さんは、どんなことをしてあげましたか。また、そのときに言った言葉を書きましょう。

○ (つづけた)

○ 一輪のコスモスの花をあげました。

ゆみ。さあ、「一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう——。」

② 「一つだけのお花、大事にするんだよう——。」の「——」にこめられたお父さんの気持ちを想像してみよう。

○ お母さんを大事にするんだよ。

③ 一輪のコスモスの花をもらったゆみ子のお父さんは、お父さんに何をもらつた、キャットと足をばたつかせて喜びました。

④ 一つの花にこめられたお父さんの願い

子どもといっしょに視写する

ともに学ぶ《青二才・赤っ恥》

一徹国語人

先生は教える人。児童は教わる人。そこで、教わる人の学びがより楽しく分かりやすくできるように、先生方も常に学び続けていく。学校のあるべき姿の原点である。

今年の五月一日、神奈川県は大阪府の人口を抜き、東京都に次ぐ大規模県となった。六月に入って、その神奈川県最大の都市、横浜市のある学校で「調べたことを整理して書く——言葉の研究レポート」という五年生の授業を参観した。

単元の設定主旨を指導書で読むと、「これまでの国語の学習を通して、児童は言葉についての多くのことを学んできた。それらは児童自身の生活や学習

を通して自然に、あるいはその時々話題に応じて体験したり身につけてきたものである。」とある。

（※破線は筆者）

ただ、全国を旅して学校訪問していると、最近の子どもたちの言語感性は、素朴な日常生活の中で育まれてくるものよりも、TVや雑誌を中心とした情報や柱とした言葉のやりとりによって造成されたもののほうが多くなっているように感じる。指導書に書かれていることが、すべての児童の実態に当てはまると言えないのだ。また、大都市と地方とでは、習得される語類にも違いがあるように感じられるし、同じ語でもその示す広さや深さ・確かさ

において違いが出てきているようにも思える。

五年生のこの時期（六月期）に言語をまとめて対象化し、課題を設定してとらえ直してみるのには、大変によいことである。

この学級では、単元の導入（一時限目）として、教科書のP38を全児童に一度黙読させ、さらに一度微音読させていた。音読によって学習の目的を理解させた上で、各人の日常生活を振り返らせ、『家の人がよく使っている言葉・よく分からないが知っている言葉・調べてみたい言葉』を出させるのである。

あまり多くは出ないであろうという

予想に反して、びっくりするほど多くの言葉が出た。

擬態語・擬声語・四字熟語・故事名言・格言・ことわざなど領域も広かったし、数も多かったが、元字を知らず仮名書きで出たものがありあった。なかには、「青二才」「赤っ恥」「はら黒い」といった色に係った言葉や、「いっぱし（二端）」「ふたまた（二股）をかける」「さんまい（三昧）」といった数の入った言葉なども出て、感心させられた。

そして、児童一人一人が短冊（縦半折大）にソフトペンで一語句ずつ書き出したものを教室の壁いっぱい貼り出して、全員で見比べる学習が、導入学習のまとめとなった。

三十二名の児童が壁に貼った短冊は二百枚ほどであったので、一人平均六語句を書き出したことになる。これだけ出れば、次時（二次の一時限目）のP39にある連想文図学習は楽しく展開することができそうである。

ただ少し心配なことは、調べ学習も確かにでき、見事に「言葉の研究レポート」をまとめあげることができたときのことである。出された二百ほどの語句とそれに連続する語句群の多くが、生活の中でしっかりと身についたものであればよいのだが、知的操作だけに終わらぬような配慮があればいいのだが、とつい思ってしまう。

小手先の技術だけが身につけてしまいはせぬかと、そのことばかりが気になるのは、私が歳をとったからなのだが、しっかりと研究レポートをまとめあげた児童が、長じて社会へ出てから《青二才が赤っ恥をかく》ようなことをいくつも重ねた上に、そのことに鈍くなってしまうたら残念でならないものとなる。

それにしても、大都市部でのこの難しい言語単元の導入を楽しく展開できたのは、児童の実態把握の正確さと教材分析・指導計画の細やかさにあったからだと思わずにはいられない。つま

り、児童の学びの前に教師がしっかりと学び、その上で児童の学び（想のゆらぎに合わせつつ）とともに学んでいく姿勢がこの単元の学習を深いものにしていったように思われる。

この学級は、指導書に例示されている十時限・十二時限よりも長く十三時限でこの単元を展開する計画であるが、これからは、何を見ても何を聞いても、読んでも、言葉のおもしろさや不思議さに興味をもち、調べてみようとするにちがいないと思えた授業であった。

一徹国語人にご意見・ご質問がある方は、広報部までお便りをお寄せください。

一徹国語人がお返事をいたします。お便りは、誌上にて紹介させていただきます。

FAX: 03-3493-5483

E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp

毎日の授業や子どもとの接し方に悩む若い先生たち。
こんな小さなきっかけから子どもが変わります。

教師が育てたように子どもは育つ

京都女子大学教授 吉永 幸司^{よしなが こうし}

国語の授業が子どもにとってわかりにくいのは、昨日学んだことが、役立っているという手応えがないことです。成果が何かわからないのです。しかし、手を抜いていると確実に生活は乱れ、人間関係が壊れるという怖さがあるのも事実です。国語はそういう奥が深い教科なのです。

一言で言えば、「教師が育てたように子どもは育つ」のが国語科なのです。教室の子どもの言葉は、教師の国語に対する考え方の鑑^{かがみ}でもあるのです。

1 「ぼくじゃない」と「ぼくもわるかったけれど」

子ども同士が諍^{いそが}いをしています。注意をすると、反応に二通りのタイプがあります。

ひとつは、「ごめんなさい。」より先に「ぼくじゃない。」「私だけなぜ注意をするのですか。」と反発する子です。睨^{にら}みつけるように言う子もいます。

もうひとつは、「ぼくも悪いのだけれど、どうしてこうなったのか聞いてく

ださい。」と、自分の非を前提にして、話を始める子です。

前者のような言い方をする子が多い教室は、教師の指示や注意が次々と出て、考える余裕がなかったり、自分の気持ちを素直に伝える機会が少ない教室です。授業では、指示通りに活動をして利口に見えるのですが、本気で語り合おうというようにはなっていないのです。

後者のような子が多い教室に共通しているのは、子どもの話をしっかりと受け止め、自分の言葉でしっかりと自分を語ることを大事にして授業を進めています。

日常の授業の中で言葉が子どもの生活に表れるのです。

2 「紙をください」で注意を受ける子、ほめられる子

生活科の授業で、少し大きめの紙が必要になりました。紙をもらってくるように指示を受け、大きな声で、「教頭先生、紙。」と言いながら職員室へ入っ

てきました。

思わず「教頭先生は紙ではありませんせん。」と言いたくなるような雰囲気でした。ところが、同じ二年生なのに、

「教頭先生、生活科で町のまとめをしています。普通の画用紙より大きい紙が三枚ほしいのですが、どの先生にお願いしたらいいですか。」

と、言う学級もありました。思わず、「丁寧^{まこと}にどうも。」と言って、上等の紙をあげたくなるような言い方です。

「上手に言えましたね。どこで勉強をしたのですか。」と尋ねました。

「国語の勉強で、先生に教えてもらいました。」

と、得意気に答える子が大きくも見え、眩^{くら}しくも見えました。「先生に教えてもらいました」が気に入りました。

3 「じゃんけん」もいいけど「話し合い」が、もつといい。

寮生活をしている学生に、掃除の時の役割分担をどんな方法で決めているか聞きました。

「いつも、いつもじゃんけん。公平だから。」

と言うのです。「話し合い」の返事を期待して、

「それぞれ、得意の分野があるので、話し合って相談をして決めているのではないの。」

と聞き返しました。この言葉の意味が通じなかったのでしょうか、不思議そうにしているの、

「自分の力や得意な部分、あるいは、仕事量など考えて、『私はここをやる』とか、『このことはあなたにお願いします』というように役割を決める方法もあるのです。」

と説明をしました。「そういう方法もあるのか」というような反応でした。学生にとって意外な提案であったようです。「話し合い」は小学校から授業の主流ですが、身につけていなかったということがわかりました。

子どもたちは何かを決める時、じゃんけんをします。班長を決める時、仕事の分担や係、委員会の役員を決める時など、いつでもです。じゃんけん

もいいけど「話し合い」がもつといいのです。

「話し合い」の仕方を指導するのは国語の時間です。その国語の時間にもじゃんけんが多いのです。発言の順を決めるのもじゃんけん、グループの意見を発表する人を決めるのもじゃんけん。

それは、「グループで話し合い、代表を決めなさい。」という指示だけで済ませていることが多いからです。指示だけでは力は伸びません。具体的に、話し合いの仕方を指導するのです。

「この意見を中心になってまとめたのは、山田さんだから、山田さんに代表をお願いしましょう。」

「わたしは、この前代表をしたので、今度は大川さんを推薦します。」

国語の授業だけでもじゃんけんを決めることはなくなつてほしいものです。「話し合い」のよさを教えておかないと「小学校からずっとじゃんけん決めていました。」「話し合いの仕方を知った記憶はありません。」と、言われそうです。

文字の組み立て方を理解して、
文字の形を整えて書こう（四年）

甲府市立新紺屋小学校 中込 繁樹

1 実践の趣旨

子どもたちは、これまでに「点画の接し方・交わり方」、「画間」について学習してきた。国語科の学習では、一学期に『漢字の組み立て』という教材で、漢字の偏や旁などの構成（かんむり、あし、によう、たれ、かまえの名称やその意味）について学習した。

二つ以上の部分に分けられる文字は、学習漢字全体の八割以上を占めている。これらの複合文字は、部分の位置関係から「左と右」「上と下」「内と外」の三つに大別できる。そのうち「左と右」（偏と旁）から成る文字は、学習漢字の中の四五〇以上もあり、「上と下」（かんむりとあし等）からなる文字は三五〇以上を数える。つまり、小学校で学習する漢字の多くは、「左右」「上下」の部分から成る複合文字であると言える。

児童の書き文字の実態を調査したところ、左右から成る漢字

では、偏の右側が縦にそろっていないため旁とぶつかっていたり、ぶつからないようにするために偏と旁との間が必要以上に開いていたりと、字形が整わない一因となっていた。また、単独文字が偏になるとその横画が右上がりになるが、ほとんどの児童ができていなかった。上下から成る漢字では、多くの児童が組み立て方に気をつけて書いていたが、上下の文字の中心をそろえることがやや達成できていなかった。

文字の形を整えて書くためには、複合文字の部分と部分の点画を、どのように譲り合い構成するかが大切な要素となる。このことを、児童には「文字の組み立て方」という言葉で理解させる。本教材では、学習漢字の多くを占める「左右」「上下」から成る文字に視点を当て、文字の形を整えて書くために、「文字の組み立て方」をどのようにすればよいのかを、特に「単独漢字が部分になったときの形の変化」に視点を当て、児童とともに考える中で学習を進めた。また、国語教材『漢字の組み立て』で学んだ知識も活用し、書写の観点からさらに学びを深めていった。

学習を進めるに当たっては、児童自ら課題を発見し、主体的に思考し活動する展開を試みた。文字がどのような原理・原則で成り立っているのか（本単元では、**組み立て方**）を意識して、日常の書字活動に取り組むための手立てとして、書写カードによるめあてや学習の基準の把握、課題を調べるためのワークシートの活用、視覚的に課題や各自の成果を捉えるための作業化や提示物の工夫等を行った。また、グループで課題を発見させたり、児童が相互に評価し合ったりするなど、多様な学習形態をとって主体的な活動を促した。

2 指導計画（全3時間）

- 【目標】 ◎「左右」「上下」の文字の組み立て方を理解する
◎「左右」「上下」の文字の組み立て方に気をつけて、漢字を書く。
○単独文字が複合文字になるときの形の変化に気づき、その違いを考える。

	学習内容と児童の活動	教師の支援
第1次	「知る」ために書く（本時） 1. 本時のめあてを知る。 左右の文字の組み立て方を調べよう ・漢字足し算「左右」をする。 2. 課題文字から原理・原則を調べる。 （硬筆・フェルトペン） 3. 発表して、学習の基準を確かめる。 4. 学習のまとめをする。	・「漢字足し算」に取り組ませ、学習への意欲を喚起する。 ・課題文字を提示して、文字の組み立て方に気づくようにする。 ・漢字プリント（ヒントカード）を配り、調べる時の手立ての一つとする。 ・ワークシートに調べたことをまとめさせる。
第2次	「解決する」ために書く 1. 本時のめあてを知る。 上下の文字の組み立て方を調べよう ・漢字足し算「上下」をする。 2. グループで話し合い、課題文字から原理・原則を見つける。（毛筆） 3. 発表して、学習の基準を確かめる。 4. 学習のまとめをする。	・前時の学習を想起させ、グループの話し合いによって、上下の組み立て方の原理・原則を導き出す。 ・6グループ。辞書等を活用する。 ・用紙は画用紙を多めに準備し、必要なだけ自由に使わせる。
第3次	「応用する」ために書く 1. 本時のめあてを知る。 文字の組み立て方に気をつけて、漢字を書こう 2. 前時までの学習を生かして、左右・上下から成る漢字を書く。（毛筆） 3. 各自、まとめた文字を提示しながら、気づいたことなどを発表する。 4. 前時までの学習を生かして、左右・上下から成る漢字を書く。（硬筆・書写ノートを活用） 5. 単元のまとめと学習の感想を書写カードに書く。	・一人一人テーマをもたせる。 ・辞書や教科書、漢字プリント（ヒントカード）を活用して調べさせ、多くの漢字を書けるようにする。 ・まとめはパネルシート形式にして掲示し、児童が付箋にアドバイスを書いて自由に貼れるようにする。 ・アドバイスは文字の巧拙ではなく、文字の組み立て方の学習をどれだけがんばれたかに視点を置いて書くようにさせる。

〈評価規準〉

	おおむね満足できる状況	努力を要する児童への手立て
関心 意欲 態度	○漢字が、ほかの漢字の部分になるときの形の変化について、興味をもつことができる。	○具体的な事象を紹介しながら、複合文字になることによって生じる、形の変化の必然性を説明する。
知識 理解	○左右、上下で成り立つ文字の組み立て方の原理・原則を理解している。	○個別指導を行い、具体的にどのようにすればよいか支援する。
技能	○文字の組み立て方に気をつけて書いている。	○用紙に補助線を入れたり、手を取って一緒に書いたり、正しい文字（部分）をなぞり書きさせたりする。

文字の組み立て方の勉強をしてパネルシートにまとめて自分で書いた今日の字はすごく上手にできました。：（中略）：ほかの勉強をしているときも、こども文字の組み立てになっているなど、友だちの発表も聞いてよかったです。

文字の組み立て方の勉強をしてふだんたくさん字を書いているけど、気づかない細かいところまで知ることができてとてもよかったです。：（中略）：自分では気づかない所も友だちの発表を聞いてよりよく知ることができました。班ごとに字を書いたり、国語の教科書で字を調べたりするのはとても楽しかったです。

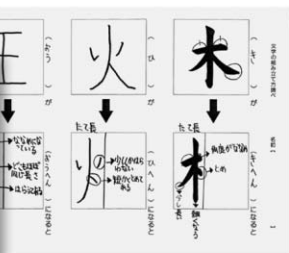
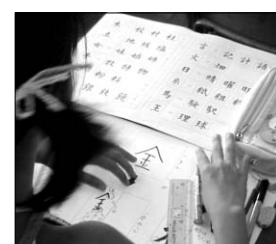
文字の組み立てで分かったことがいっぱいあってよかったです。自分の文字のちよつとしたまちがえやみんながみつけたことに「そうなんだあ」がいっぱいありました。これからもっともつとっぱい見つけていきたいです。

ぼくは、最初へんとかになると、ちよつとはらいが変わるぐらいだと思っていたけど、この三時間の授業を通して、へんやかんむりになると元の字よりこんなに変わるといことが分かりました。また、そのちがいに気をつけると、うまい字が書けました。それに友だちの発表も聞き、それも気をつけると、とてもうまく書けました。楽しかったです。

4 書写カードから——学習全体を通しての児童の感想

3 本時の展開（第1次）

- 【目標】 ◎一つの漢字がほかの漢字の部分になるときの形の変化に気づく。
○文字の組み立て方に気をつけて書く。

	学習活動と教師の支援・発問	学習の様子
とらえる	1. 学習のめあてを知る。 ・書写カードにめあてを書かせる。 2. 文字の組み立て方に興味をもつ。 ・「漢字足し算」をする。 （林・坂・姉・特・粉など）	 子どもたちが「木偏」で気づいたことは五つあった。 ・縦長（長方形）になる。 ・右払いが止め（点）になる。 ・横画が斜め（右上がり）になる。 ・横に縮められて縦画が細くなる。 ・左払いが少し長くなる。
確かめる	3. 課題を調べる。 ・「林」の文字を見て気づいたことを話し合う。 ○「はやしは 木木 正しいかな？」 ・「木」と「木偏」の違いを考える。 ・単独文字より幅を狭く ・右払いは、点に ・縦画と横画が交わる位置	 ▼ 漢字プリント（ヒントカード）  ▲ 児童が調べたワークシート 
広げる	4. ほかの文字を調べる。 ・「土」「女」「牛」など、各自の課題で調べる。 ・漢字プリント（ヒントカード）を配り、単独文字が偏になったときの変化を調べる手立てとする。 ・漢字辞典を活用する。 ・ワークシートに調べたことを書き込む。 5. 調べた文字について発表する。 ・OHC（実物投影機）を使い、拡大して投影する。	▼ 漢字プリントや漢字辞典を使って調べたことを、OHCを活用して発表した。  
まとめる	6. 学習のまとめをする。 ・2回目の「漢字足し算」を書き、1回目の文字と比較させる。 ・書写カードに、わかったことや感想を書かせる。	

5 成果と課題

今回は、「文字の組み立て方の原理・原則を理解する」ことに重点を置いて実践した。第1次（本時）では、「単独文字が偏になると縦長（長方形）になる」という形の変化に視点を当てたが、児童は、それだけではなく、点画の変化や画の交わる位置などについても自ら発見し、課題としてもつことができていた。また、児童の感想から、文字の組み立て方に興味をもち、日常の書き文字にも生かしていこうとする姿勢が見られた。

授業では、児童の興味・関心を引き出すため、「漢字プリント（ヒントカード）」で多くの字例を挙げたが、もつと字例を精選し、焦点化してもよかった。

授業での児童の興味・関心をいかに持続させるか、また身につけた「文字の組み立て方」についての知識・技能を、日常の書写活動にいかにかきかしていくのか、今後継続的に取り組んでいくべき課題と言えるだろう。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

子どもたちは、不思議発見、謎解きが大好きで、これらの不思議・謎に対して、興味を抱くだけでなく、「なぜ？」「どうして？」と問いかけるものです。問いかけに対して教師が直ちに解答を用意する必要はなく、「考えてみよう。」と促すことが大切です。本授業では、興味・関心を引き出し、思考を促し、児童一人一人が解答や課題解決を行っています。「生きる力」「人間力」を高めるために、書写の授業に思考活動を取り入れることを大いに進めていかなければなりません。その意味で、本授業はその方向性を示していると言えます。

（M）

連載 書写ってこんなにも面白い！ ②1

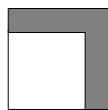
書写の要素

字形：内外の組み立て方のポイント③

山梨大学教授 宮澤 正明

今回も内外の組み立て方で、二方向を囲む形やそれを要素にする字例を取り上げます。

■二方向を囲むかまえ



二方向を囲むかまえには、「气（きがまえ）」「行（ぎようがまえ）」「弋（しががまえ）」「戈（ほこがまえ）」などがあります。

ここでは、「气」を取り上げます。

〈气〉

「気分・気温・天気・空気」など、学校生活において使用頻度の高い熟語に用いられる「气」ではありますが、児童は、字形を整えて書くのに苦労しているようです。

次のような形が見られます。

ア 頭部肥大形

頭部が肥大化して、「メ」を書くスペースが少ない形

气 气 气

この場合は、三本の横画間をつめて、それを長く書くよう指導すれば、すぐに課題は解決されます。

イ 四画目（折れ、その部分）曖昧形

折れが不適切で、その長さや方向が曖昧な形

气 气 气

この場合は、折れの部分で突き返し、大きな円を書くように指導するとよいでしょう。

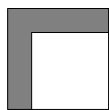
ウ 「メ」部不定形

「メ」の大きさ、形、位置が定まらない形

气 气 气

この場合は、右下図のように、四画目の始筆と終筆を線で結び、それに直交する線の上に「メ」が乗るように指導すると理解しやすいでしょう。

■二方向を囲むたれ



たれには、「尸（まだれ）」「尸（がんだれ）」「尸（やまいだれ）」「尸（しかばね）」などがあります。

これらの組み立てでは、内部の部分の位置がポイントになります。左払いに相当する画が右側にないので、内部の部分を少し右に位置させることで、左右の力の均衡が図られるようになります。この関係を知って書くと、たれの文字は自然に安定した形になります。

店 病 店 病

内部の中心をずらして均衡を図る方法は、見た目の重さ（視覚重量）の関係なので、児童にとっては理解しにくいかもしれません。そこで、文字全体の中心と内部の形の中心がずれていることに気づかせることで理解されやすくなると考えます。

原 広 屋

今回取り上げた組み立ての漢字は、内側の部分が全体の中心からずれているために、整えにくくなります。初めから文字例で説明するとわかりにくくなるので、概念図を用いて中心のずれを発見させてみたいものです。また、概念図によって思考や推理を働かせることにもつながります。書写指導は、書き文字教材（手本）を書く前から子どもたちに提示し、解説をすることが多いので、児童の思考停止状態を招きやすくなります。子どもたちの思考・推理によって、字形を整える原理・原則が発見されるような指導を工夫してみたいものです。

「光村の本」 好評発売中！

大人の本の作家と子どもの本の作家が交流する。バトルする。新しい書き手が参加する。挑戦する。児童文学の冒険、ふたたび！

	書 名	本体価格	定価	判型
	飛ぶ教室 2006夏 6号 ブーの森で語り明かそう(最新刊)	952	1,000	B5変
	飛ぶ教室 2006春 5号 創刊一周年!創作特集号	952	1,000	B5変
	飛ぶ教室 2006冬 4号 トーベ・ヤンソンのもうひとつの顔	952	1,000	B5変
	飛ぶ教室 2005秋 3号 神沢利子の世界	952	1,000	B5変
	飛ぶ教室 2005夏 2号 少女小説の知的なくらみ	952	1,000	B5変
	飛ぶ教室 2005春 1号 復刊特別号	952	1,000	B5変
年4回(1・4・7・10月)発売				

日本文藝家協会編。人生の機微に触れる珠玉のエッセイ・アンソロジー！

	書 名	本体価格	定価	判型
	ベスト・エッセイ 2006 意地悪な人(最新刊)	2,000	2,100	四六判
	ベスト・エッセイ 2005 成り行きにまかせて	2,000	2,100	四六判
	ベスト・エッセイ 2004 犬のため息	2,000	2,100	四六判
	ベスト・エッセイ 2003 花祭りとバーミヤンの大仏	2,000	2,100	四六判
	ベスト・エッセイ 2002 落葉の坂道	2,000	2,100	四六判
	ベスト・エッセイ 2001 新茶とアカシア	1,900	1,995	四六判
	ベスト・エッセイ 2000 歌のいろいろ	1,900	1,995	四六判
	ベスト・エッセイ 99 花のともだち木のともだち	1,900	1,995	四六判
	ベスト・エッセイ 98 夜となく昼となく	1,900	1,995	四六判
	ベスト・エッセイ 97 待ち遠しい春	1,900	1,995	四六判

小学生のための英語テキスト。英語を使ったコミュニケーションの楽しさを、子どもたちと一緒に実感してください。

	書 名	本体価格	定価	判型
	JUNIOR COLUMBUS 21 児童用テキストBOOK1(3・4年用)	524	550	B5判
	JUNIOR COLUMBUS 21 児童用テキストBOOK2(5・6年用)	524	550	B5判
	JUNIOR COLUMBUS 21 指導書BOOK1(CD3枚・別冊ブックレット付)	4,571	4,800	B5判
	JUNIOR COLUMBUS 21 指導書BOOK2(CD3枚・別冊ブックレット付)	4,571	4,800	B5判

中国人学習者のための総合日本語テキストの決定版！

	書 名	本体価格	定価	判型
	新版中日交流 標準日本語 初級上下巻セット(分売不可)	4,000	4,200	B5判
	新版中日交流 標準日本語 初級CD(6枚組み)	3,000	3,150	—
	中日交流 標準日本語 中級上	1,800	1,890	A5判
	中日交流 標準日本語 中級下	1,800	1,890	A5判
	中日交流 標準日本語 会話編	1,500	1,575	A5判
	中日交流 初級 標準日本語 会話編発音部 カセット(全1巻)	700	735	—
	中日交流 初級 標準日本語 会話編会話部 カセット(全3巻)	2,100	2,205	—
	中日交流 初級 標準日本語 会話編語彙部 カセット(全4巻)	2,800	2,940	—

光村の好評ロングセラー。国語教育の至宝と三巨匠の画集。

	書 名	本体価格	定価	判型
	近代国語教育論体系 全20巻	172,816	181,457	菊判
	近代国語教育論体系 増補5巻	43,205	45,365	菊判
	続・国語教材の読み方読ませ方 井上敏夫著	1,500	1,575	B6判
	説明的文章の読み方読ませ方 井上敏夫著	1,942	2,039	B6判
	授業開きの構造 安居總子著	2,200	2,310	四六判
	小林古徑 作品と素描	90,000	94,500	B4判
	坂本繁二郎 水彩画集	25,000	26,250	B4変
	福田平八郎 作品と素描	95,000	99,750	B4判

●全国の書店および、弊社HP(光村チャンネル<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> からオンラインショッピングをクリック)にてお求めいただけます。

小中一貫教育の先駆的な教育特区品川区と国語の光村図書が共同開発・編集。

漢字ステージ100

品川区小中一貫教育 国語科

全3巻：1・2年生 3・4年生 5・6・7年生(8・9年生)

定価 各950円(本体905円) B5判横 平均130頁

楽しく学べる工夫がいっぱい。

- 常用漢字1945字を3分冊で学習できます。
- 光村の国語教科書のキャラクター(カンジー博士)や、漢字の手書き文字、教科書体を使うことで、教科書との一貫性を図っています。



著者自ら小学校・中学校・高等学校の現場で授業した経験が生きる。

授業をもう一段深めるのに役立つ理論。

名詩の世界

西郷文芸学入門講座(全7巻) 西郷竹彦 著 A5判並製

		本体価格	定 価
名詩の世界 第1巻	文芸の構造 視点と対象・形象の相関	2,095円	2,200円
名詩の世界 第2巻	ことばの芸術 言語・文法をふまえて	2,381円	2,500円
名詩の世界 第3巻	題材と主題 詩の形・比喩の本質	2,095円	2,200円
名詩の世界 第4巻	比較【類比・対比】 典型と比喩について	2,381円	2,500円
名詩の世界 第5巻	虚構の方法・世界 展開法と層序法と折衷法	2,095円	2,200円
名詩の世界 第6巻	文芸学の筋論 表記の表現性・形象性	2,095円	2,200円
名詩の世界 第7巻	文芸の美と真 ファンタジー・条件・縁起	2,381円	2,500円



教科書で習ったあのなつかしい作品が、今よみがえる。

光村ライブラリー・中学校編

- 昭和30年から平成14年までに国語教科書に掲載された時代を超えて心に響く、感動の71作品。
- 全5巻—文学(3巻)・説明文(1巻)・詩(1巻)。
- 読みの抵抗が少ない—常用漢字は、すべてルビ付き。

セット定価 5,250円(本体5,000円)

各巻定価 1,050円(本体1,000円)

菊判上製 各巻平均120頁



光村ライブラリー

- 光村図書の小学校国語教科書の中から、118作品を一挙収録。
- 昭和46年から平成12年までの教科書から精選。
- 教科書収録時の学年に基づき、低・中・高学年別に編集。
- 学年の配当漢字にふりがなを付け、読みやすさに配慮。

セット定価 18,900円(本体18,000円)

各巻定価 1,050円(本体1,000円)

菊判上製 各巻平均80頁

監修：樺島忠夫／宮地裕／渡辺実





ホームページ「光村チャンネル」がリニューアルしました！



まずはトップページへアクセス！
http://www.mitsumura-tosho.co.jp

●教科通信

小学校国語教育相談室のバックナンバーは、
こちらでご覧いただけます。
国語以外の教科情報も満載！

●教科の部屋【小学校国語】

授業に役立つアイデアや教科書に関する
内容など、先生方をサポートする情報が
満載！

●情報BOX

年間指導計画・評価計画資料のダウンロー
ドや研究会情報の検索ができます。授業に
役立つリンク集も充実！

●光村ブックランド ●光村コミュニティ【会員専用】

子どもたちの読書を応援するページです。大人から子どもまで、
多くの方に向けてバラエティーに富んだコーナーをご用意しました！

お知らせ

新着情報はこちらをチェック！

教科書目次と資料リンク集

サイト内の資料が一覧できます！

読み物教材一覧

読み物教材執筆者に関する情報はこちら！

授業のスパイス

明日からの授業に役立つ情報をご紹介します！

教科書ここが知りたい

教科書に関する疑問・質問はこちら！

言葉の質問箱

漢字や語彙・表記に関するQ&A！

資料箱

教材出典一覧表などの資料はこちら！

授業に役立つ情報が満載！ぜひご覧ください！

平成18年度下巻の教科書では、平成17年度から次の箇所を訂正しております。
校内の先生方で確認のうえ、ご指導の際には、十分ご留意くださいますよう、お願いいたします。

【誤記あるいは表記・表現の統一】

学年	ページ	行	平成17年度	平成18年度
2下	27	上3	八木田 宣子 やく	八木田 宣子 やく
4下	45	6	これで、今日の話し合いは終わります。	これで、今日の話し合いを 終わります。
5下	33	欄外	欄外	「学ぶ」を削除 学ぶ（挿入）
6下	48	欄外	ぐうと引つ張 つてみてから、 人工的にサンムトリ火山を爆発させて	ぐうと引つ張 つてみてから、 人工的に火山を爆発させて
	77	12	人工的にサンムトリ火山を爆発させて	人工的に火山を爆発させて
	19	9、10	グスコブドリが爆発させたサンムトリ火山。	グスコブドリが爆発させた火山。
	20	15	挿絵中	火山
	21	挿絵中	サンムトリ火山	火山

光村「国語デジタル教科書」を
お使いのみなさまへ

教科書の訂正にともなう「国語デジタル教科書」のバージョンアップを行います。
ご購入時にお送りいただいた「お客様登録シート」に基づきまして、バージョンアップCDをお送りいたしますので、まだご登録がお済みでない場合は、至急ファクシミリにてお送りいただきますようお願い申し上げます。
なお、ご不明の点は、お客様窓口
(03-3493-5741)までご連絡ください。



お知らせ

【研究会のご案内】

■平成十八年度 愛知県東海市教育実践中間発表会

開催日 平成十八年十一月八日（水）十六日（木）

会場 東海市内各小中学校 富木島中学校区他五会場

テーマ さらなる授業改革に挑む ～学思行、相須ツテ良トナス～
―細井平洲先生の教え―

連絡先 東海市立上野中学校 教頭 白城智教

〒四七六・〇〇〇二 東海市名和町奥平戸二八

TEL 〇五一(六〇三) 一二四八

FAX 〇五一(六〇三) 一二四九

http://www.medias.ne.jp/yokosuks/

■第二十五回 中国地区国語教育研究大会 鳥取県大会

開催日 平成十八年十一月十七日（金）

会場 授業研究会―小学校部会 倉吉市立河北小学校
中学校部会 湯梨浜町立北浜中学校

講演会ほか―倉吉未来中心・倉吉交流プラザ

テーマ 「豊かな心と確かな言葉の力を育てる国語教育の創造」

講演 小林 豊 氏（絵本作家）

「世界一美しいぼくの村」の著者

連絡先 鳥取県琴浦町立赤碕中学校 鳥山秀穂

〒六八九・二五〇一 鳥取県東伯郡琴浦町赤碕一九三・一

TEL 〇八五八(五五) 〇〇〇二

FAX 〇八五八(五五) 一二〇二

【言語教育振興財団研究助成金 申請募集】

言語教育（国語教育・外国語教育等）の充実・発展を図るために、優れた研究開発を行う個人又は団体に対して助成します。

◇助成内容

- ① 言語教育の内容・方法に関するもの
- ② 言語教育教材の質的向上に関するもの
- ③ 教育機器を利用した言語教育の在り方に関するもの

◇応募資格

小・中・高等学校で国語、英語、日本語教育を担当する教員
個人・団体（研究団体、学校（学年単位も含む））

◇助成件数及び金額

助成件数は五十件までとする。
助成金額は一件につき十万～四十万円とする。

◇応募方法・締め切り

研究開発活動についての企画書又は実践報告書等の参考書類を添えて、所定の申請用紙に記入の上、十二月二十五日（月）までに、当財団事務局に郵送してください。（返信用封筒を同封のこと）

◇決定・発表

当財団「選考委員会」により選考を行い、平成十九年二月下旬に決定通知をします。

◇問い合わせ先

財団法人「言語教育振興財団」事務局

〒一四一・〇〇二一 東京都品川区上大崎二・十九・九

TEL 〇三(三四九三) 七三四〇

FAX 〇三(三四九三) 一二七四、一二七七

平成17年度版小学校国語教授用ソフト 大好評 絶賛発売中!!



光村「国語デジタル教科書」は、
プロジェクトなどの教材提示装置用に
開発された一斉学習のためのソフトウェアです。
全員で同じ画面を見ながら学習することで、
授業に一体感が生まれます。

光村国語デジタル教科書 1~6年

Windows® 版

学校フリーライセンス価格：各学年 52,500 円(本体 50,000 円)
※「学校フリーライセンス」は、校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。



ただいま体験版を配布いたしております。
詳しい内容、体験版のお申し込みは、ホームページをご覧ください。

<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>

※Windows®は、米国マイクロソフト社の登録商標です。

光村図書

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
TEL 03-3493-2111 (代表) 03-3493-4742 (直通) FAX 03-3493-5483
E-mail digital-info@mitsumura-tosho.co.jp

アンケートのお願い

みなさんのお声を、今後の広報誌編集の参考にさせていただきたいと思います。
下記アンケートにご記入のうえ、弊社広報部までお寄せください。

Q1 今号で関心をもたれた記事、役に立った記事はなんですか。

Q2 国語教育全般の中で、今ご関心のある話題や人物があれば、お聞かせください。

Q3 「国語教育相談室」に対するご意見・ご要望があれば、お聞かせください。

●差し支えない範囲でお答えください。

性別 ☐ 男性 ☐ 女性 年齢 () 歳
勤務先 ☐ 小学校 ☐ 中学校 ☐ 教育委員会 ☐ その他 ()
学校名・教育委員会名 ()

●「国語教育相談室」の個人宛送付とメールマガジン配信をご希望の方は、送付先をご記入ください。
次号より送付いたします。(無料)

☐ 「国語教育相談室」送付希望 (☐ 小学校版 ☐ 中学校版)

お名前: _____

ご住所: 〒 _____

☐ メールマガジン配信希望 メールアドレス: _____

ご協力ありがとうございました。

[送付先] 光村図書出版株式会社 広報部 FAX: 03-3493-5483

2006/8/S58

※弊社ホームページ「光村チャンネル」<http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>「教科通信」のコーナーからも、アンケートにお答えいただけます。
※お預かりしました個人情報については、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切に管理・保護いたします。
※お寄せいただいたご意見は、誌上に掲載させていただくことがあります。

キ
リ
ト
リ
線